

三重県桑名市

桑名城下町遺跡発掘調査報告書

～萱町 93 地点～

2001. 3

桑名市教育委員会

例 言

- 1 本書は桑名城下町遺跡（市遺跡No.99）萱町93地点の発掘調査報告書である。
調査地の所在は三重県桑名市萱町93番地である。
- 2 発掘調査は個人住宅建設及び、本堂建設に伴う事前調査として、国庫及び県費の補助を受けて行った。
- 3 現地調査は平成11年5月28日から9月30日にかけて実施した。室内での整理作業及び、報告書作成は、平成11年6月1日から平成13年3月30日にかけて実施した。
- 4 調査体制は以下のとおりである。（所属は調査参加時）
調査主体 桑名市教育委員会
調査担当 平野亜紀（桑名市教育委員会）
調査補助員 日紫喜勝重、水谷吏江
調査参加者 長沼毅、勝亦貴之（以上愛知学院大学大学院学生）、大杉規之、大村至広、竹内弘光、後田将志、高木真紀、水野義隆、浅野直士、大橋博幸、北井隼人、佐野梓、秋山清爾、滝沢祐介、真野敏彦、宮島克明（以上愛知学院大学学生）、後藤千佳（南山大学学生）、安中祥子、安中仁美、石川清文、稲垣英三子、太田次夫、中野義弘、真野辰江、渡部一正
なお、試掘調査と、文化財保護法に基づく諸手続及び調整事務等については水谷芳春（桑名市教育委員会）が担当し、現地調査及び報告書作成については斎藤理（桑名市教育委員会）の協力を得た。
- 5 本書は第1章第1節を日紫喜、第1章第2節を長沼、その他を平野が執筆した。文献史料の調査および墨書等の判読については長沼、勝亦が行い、全体の編集は平野が行った。
- 6 調査に際しては下記の機関、方々にご指導、ご協力いただいた。記して感謝の意を表す。
三重県教育委員会、(株)イビソク、(株)東都文化財保存研究会、山家建設(株)、浅野弘子（名古屋市博物館）、稲垣正宏（滋賀県文化財保護協会）、井上喜久男（愛知県陶磁資料館）、尾野善裕（京都国立博物館）、河内一浩（羽曳野市教育委員会）、水野裕之（名古屋市見晴台考古資料館）
なお、出土した萬古焼についてご指導いただいた中西純子（朝日町教育委員会）は平成13年1月に急逝された。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
- 7 本調査は、法盛寺住職福井照真、副住職福井孝尚、両氏をはじめ、法盛寺責任役員及び門徒総代、法盛寺総合整備事業建設委員の方々の、文化財に対する深いご理解のもと実施することができた。調査に対する格別のご協力、ご援助に対して厚く御礼申し上げます。
- 8 本調査に関する諸資料は、桑名市教育委員会にて保管している。

目 次

本 文 目 次

例 言

第1章 位置と環境

第1節 調査位置と周辺の環境 1

第2節 法盛寺の歴史的変遷 2

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯 4

第2節 調査の方法と経過 4

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 I面の調査 5

第2節 II面の調査 8

第4章 まとめ 11

表 目 次

表1 層序一覧表 10

表2 遺物一覧表 (1) 14

表3 遺物一覧表 (2) 15

表4 刻印瓦一覧表 16

表5 刻印瓦等出土一覧表 17

挿 図 目 次

挿図 1 調査地点位置図 1

図 版 目 次

図版 1 調査区位置図 18

図版 2 I面遺構図 19

図版 3 I面遺構図 20

図版 4 I面基壇土坑立面図 21

図版 5 I面遺構図 22

図版 6 I面遺構図 23

図版 7	Ⅱ面遺構図	24
図版 8	遺物実測図	25
図版 9	遺物実測図	26
図版 10	遺物実測図	27
図版 11	遺物実測図	28
図版 12	遺物実測図	29
図版 13	遺物実測図	30
図版 14	遺物実測図	31
図版 15	遺物実測図	32
図版 16	遺物実測図	33
図版 17	出土瓦刻印拓本	34
図版 18	瓦ヘラ書き拓本	35
図版 19	瓦ヘラ書き拓本・陶器刻印拓本	36

写真図版

写真図版 1	37
写真図版 2	38
写真図版 3	39
写真図版 4	40
写真図版 5	41
写真図版 6	42
写真図版 7	43
写真図版 8	44
写真図版 9	45

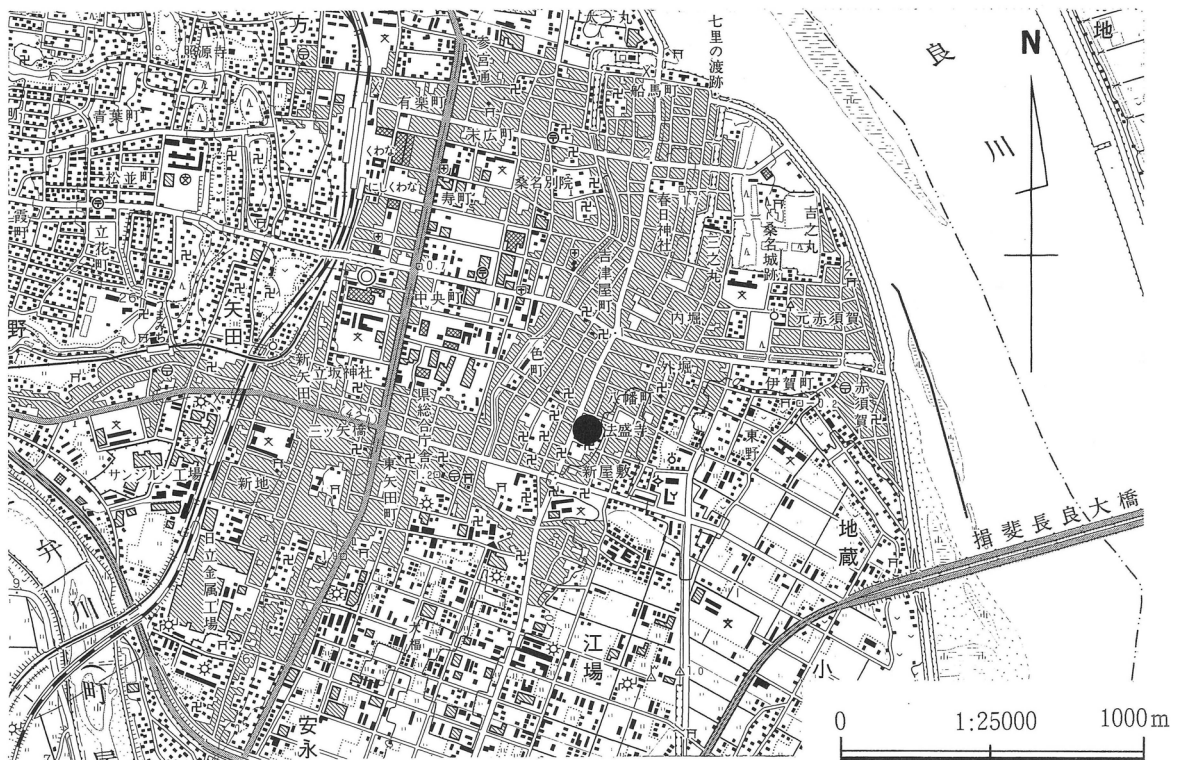
第1章 遺跡の概要

第1節 調査位置と周辺環境

本調査地は、三重県桑名市萱町93番地に所在する。三重県の北東部に位置する桑名市は、地域の北東部を揖斐川・長良川が流れ、伊勢湾に注いでいる。本調査地を内包する桑名城下町遺跡は河川の沖積作用によって形成された低地に発達した近世城下町である。桑名城下町が近世城下町としての体裁を整えたのは、上総国大多喜から入封した本多忠勝によって行われた、いわゆる「慶長の町割り」の際であったとされる。本調査地に所在する浄土真宗法盛寺も、この時に益田庄三崎から移転したと伝えられている。

近年までこの城下町の実体が不明であったが、平成2年度に行われた桑名城の調査を初めとしていくつか行われてきた発掘調査によって解明されつつある。そのいくつかを紹介すると、平成9年度に行われた伊賀町69地点の調査では、柱穴数基、土坑、その他2条の溝が確認されている。遺物は「朝定」銘を持つ刷毛や木筒等の木製品、17～19世紀までの肥前・瀬戸美濃等の陶磁器が出土している。また、平成10年度に行われた外堀24地点の調査では、溝や土坑を確認している。

このように一部ではあるが、発掘調査により桑名城下町遺跡の環境が次第に明らかになりつつある。



挿図1 調査地点位置図 (1/25000)

第2節 法盛寺の歴史的変遷

桑名法盛寺は、現在桑名市萱町の東側中央部にあり、柳堂と称し、浄土真宗本願寺派の寺院である。本尊は阿弥陀如来像で、この仏像には三尺余の歯があるので、歯吹阿弥陀と俗称される。寺中には善竜寺・教宗寺・西福寺・専久寺・照林寺があり、また末寺は北伊勢四郡内に60余寺ある。

ところで法盛寺に関する研究は、長島一向一揆の際伝来の宝物が散逸したと伝えられ、創建以来度々本堂が失われたという事情から、残存史料が少なく、諸氏による見解の一致が見られない。そこで、ここでは法盛寺の由緒に関する諸見解を紹介しておく。

まず、近藤奎氏は『桑名市史』（桑名市教育委員会、1959年）において、法盛寺が元は三河国矢矧の天台宗柳堂阿弥陀寺という寺院であり、親鸞法弟円房が住み帰したとしている。第六世祐慶の時に桑名に移り、第十世祐珍の時に寺号を法盛寺と改称したとある。この根拠となっているのは、『伊勢国桑名郡益田庄桑名萱町法盛寺由緒』であろう。

そして新行紀一氏は、柳堂が後に最勝寺となったとしている（『新編岡崎市史』第2巻中世、1989年）。その根拠は、寛政年間（1789～1801）成立と推定されている「三河堤」の著者本間長玄の従祖父僧元辰と上宮寺住職が、元文年間（1736～41）に上洛した際、最勝寺で聞いた事実の真偽確認のために、垣村西光寺の方便身像裏書を見に行ったところ、永正11年（1514）8月10日付実如下附のもので、「三州柳堂最勝寺門徒勢州垣村願主釈空念」とあり、親鸞・蓮如の絵像裏書にも「柳堂最勝寺下」とあったという記事からである（註）。

この新行氏の見解に対し、中野和之氏は「濃尾勢地域門徒団における親鸞伝承と門徒団（下）」（『龍谷史壇』108、1997年）と言う論文において批判をしている。中野氏がその理由に挙げているのは、西本願寺蔵で明応5年（1496）7月9日の「方便法身尊像」の裏書で、これには「興正寺門徒柳堂阿弥陀寺下」「勢州桑名郡益田庄三崎西町」と記されている。また新行氏が根拠とする「三河堤」よりも信頼性が高いとする『長嶋古今図考小序』『長嶋略少記』の最勝寺の伝承から、三河から移ったことを示す記載がないとしている。それに加えて垣村（現在の朝日町柿）西光寺の方便法身尊像裏書には「明応五年六月二日 興正寺門徒柳堂阿口陀寺 勢州朝明郡柿村講中」とあり、柳堂最勝寺とは記載されていないともしている。これ以外にも中野氏は「三河堤」の内容についていくつか検討を加え、柳堂が最勝寺ではなく、法盛寺であると結論付けている。

しかし、中野氏が法盛寺を三河国矢矧とする最大の根拠は『伊勢国桑名郡益田庄萱町法盛寺由緒』である。この由緒については史料批判が詳細にできないということ、また「三河堤」の伝承については、法盛寺と最勝寺を混同した可能性があるという指摘に留まり、その見解が落ち着くまでには至っていない。

近世の法盛寺については、慶長の町割で現在地に移ったとされ（『三重県の地名』、その本堂は、寛永18年（1642）創建であるが、寛文5年（1665）焼失し、以後天災による崩壊と再建を繰り返している（『桑名市史』）。また、伊勢国惣触頭となっていることは重要である（『本派本願寺史』）。地

域に限定されないという寺院の本末制度において、幕藩体制下の既存の支配機構では幕府の寺院支配は困難であったため、江戸に録所を定め、録所が受けた幕府寺社奉行の命令を各国においてそれぞれ所属の寺院に伝達する触頭が置かれた。触頭は、幕府の命令を伝達するだけでなく、藩の寺社奉行の命令を伝え、所属の末寺から寺社奉行へ提出する願書などを取り次ぐこともその職務であった（以上の触頭の記述については『日本仏教史 近世近代篇』法蔵館、1980年を参照した）。法盛寺が伊勢国惣触頭になったのは、『桑名市史』では文化8年（1811）とされるが、これ以前の寛政元年（1789）の「本願寺律令」によって、当寺が触頭となったことがわかる（『真宗史料集成』）。

明治8年（1875）には西本願寺桑名別院となり、同15年には別格寺となった。本堂は、大正4年（1915）に本山覚王殿を模して再建され、内陣余間に極彩色塗箔をなし雅麗を極めたと言われるが、昭和20年（1945）の戦災により全伽藍約850坪を焼失し、同23年仮本堂建築に着手、これは2年後の同25年に竣工しており、以後補強工事を施している。

しかし、いずれにせよ近世において法盛寺は、柳堂として認知されていたようで「柳堂」ないしは「柳」と記された遺物が多く発掘されている。

（註）「三河堤」は、吉田本町の医師本間張玄が著した三河国の地誌。1郡1巻の割合で、初めに郡の地図及び村名を挙げ、出生衆、寺院並墳墓之部の三部に分け、『三河国二葉松』を根幹に極めて詳細に記述し、天明6年成立「三河船」を引用していることから、寛政前後に成立したと推定される未完の書であるとされている（近藤恒次『三河文献集成』豊橋文化協会、1954年）。

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成9年10月16日付教文第391号にて、宗教法人法盛寺（代表役員福井照真）から、法盛寺本堂（桑名市萱町93番地）の建て替えに際して、文化財の所在の有無及びその取り扱いを照会する文書が桑名市教育委員会に提出された。市教育委員会は周知の遺跡である桑名城下町遺跡（市遺跡No.99）の範囲内であること、遺構に影響する開発を行う場合は事前に発掘調査が必要な旨を回答した。

その後協議を行うとともに、遺構の有無及び残存状況を確認するための試掘調査も行った。試掘調査では、戦災復興等によって攪乱を受けていた部分もあったものの、遺構及び、遺物包含層が良好に残存する部分を確認された。試掘結果をもとに再度協議を行ったが、本堂建設の工法上、現状保存が困難と考えられる部分に関しては、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

法盛寺より、文化財保護法第57条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を受けた市教育委員会では、平成10年1月5日付教文第391の4号で三重県教育委員会に届出を行い、平成11年5月28日発掘調査に着手した。文化庁に対する埋蔵文化財発掘調査着手の報告は、文化財保護法第98条の2第1項に基づき、平成11年6月25日付教文第61の2号にて行った。

第2節 調査経過

試掘調査によって確認されていた、昭和20年の桑名空襲の際の焼土層を重機によって除去した後、調査区を4分割（それぞれ北西をa区、北東をb区、南西をc区、南東をd区とした。）し包含層の遺物の取り上げを行い、同時に遺構面の検出を行った。地表面から約50cm掘り下げたところで、礫のつまった土坑等が発見されたため精査したところ、基壇や通路等が構築されているのが確認できた。この面は一部に桑名空襲の際に被熱した部分があることや、聞き取り調査等から、昭和20年まで使用されていた面と考えられた。しかし、検出された基壇は寺伝等に記されている、安政年間に建立された本堂の基壇である可能性があったため、遺構面（I面）として認識し、航空測量等を行うこととした。その後、基壇の構築状況や改修の有無を確認するため断ち割り調査を行ったが、近世段階で構築されたことが明らかになった。

また、断ち割り調査では、基壇造成前と思われる面（II面）が確認されたため、断ち割りトレンチを拡張し、調査を行った。遺物の取り上げはI面と同様の4区画にて行っている。II面はI面に比べて性格の明瞭な遺構が少なかったが、断ち割り調査によって基壇の地業とも考え得る土層が検出されるなど、意義ある調査であったと思われる。II面に対しても航空測量を実施し、現地での調査は9月30日に終了した。

第3章 検出された遺構と遺物

前章で述べたように遺構面は2面確認され、検出順にそれぞれⅠ、Ⅱ面とした。いずれも小規模な改修が多く施されており、比較的長期にわたり生活が営まれてきたものと考えられる。

なお、Ⅰ面を覆っていた焼土層は前述したように、昭和20年の桑名空襲に伴うものであり、焼土層出土遺物については本報告では図化しなかった。但し一部の瓦に施されていた刻印は拓影のみ掲載している。

以下に遺構等の詳細を記すが、層序の詳細については表1、遺物の詳細については表2を参照されたい。また、瓦に施された刻印、ヘラ記号等については表3にまとめた。

第1節 Ⅰ面の調査

遺構は発掘区の北半分では戦災復興による攪乱が目立ったものの、全体としての残存状況はおおむね良好であった。特に基壇は礎石が失われてはいるが、ほぼ当時の姿で検出することができた。その他、通路、石積等が確認された。主な遺構について以下に詳細を記す。

1. 基壇

調査区のほぼ南半分で東西23m×南北11mにわたり検出された。北端は調査区内で確認されたが、西端、南端は調査区外となるため確認されなかった。東端については上端部のみが検出された。北端はその北側で検出された通路に比べ、役0.8m高く盛土されているうえに石積が施されており、ほぼ垂直に側面がつけられている。東端は上端のみの検出であるため、詳細は不明だが、下端につながると考えられる落ち込みが発掘区の最東で検出されている。

基壇上面はほぼ平坦で標高は約1.1mとなっているが、検出された基壇の北東部にあたる溝1の北側と、東端となる土坑1の東側については、約0.2m低い標高約0.9mの平坦面が検出された。

基壇上の遺構には、礎石が据えられていたと考えられる、直径5～20cmの礫の充填された土坑15基、その北側を東西方向に走る礫の充填された溝1条と、さらにその北で埋甕が4基検出された。

土坑1～7及び土坑8～13はそれぞれ東西同一線上に配置されているが、土坑5と6、11と12の間は若干間隔が広がっている。また、土坑14、15は南北同一線上にはあるが、東西に並ぶものがない。いずれも建物等の上部構造に関係するものと思われる。

土坑の中には埋土上面に円礫ないしは角礫が1～3個検出されたものもある。これらは土坑上面のほぼ中央部に配置されていることから礎石とも考え得るものであるが、上面が水平でないこと、土坑に比べて規模が小さいこと等から、礎石を支える大型の根石と判断した。また、基壇上面には多数の小礫が検出されたが、土坑の周辺に集中することから根石の一部とも考えられる。

個々の土坑及び、その他の溝、柱穴については以下に詳細を記す。

土坑1 直径2.2m、深さ1.2m。

土坑2 直径2.2m、深さ1.2m。寛永通寶（1）と鉄釘（2）が出土。

土坑3 直径2.6m、深さ1mの円形。寛永通寶（3・4）、石臼（5）が出土。

土坑4 直径2.1m、深さ1m。

土坑5 直径2.8m、深さ1.4m。灯明皿（6）、加工円盤（7）が出土。

土坑6 直径2.3m、深さ1.1m。南半分は近年の攪乱を受けている。

土坑7 直径2.3m、深さ1m。土師器皿（8）、陶器碗（9）、陶器植木鉢（10）、播鉢（11）が出土。

土坑8 上部は近年の攪乱を受けており、正確な規模は不明である。火入れ（12）が出土。

土坑9 直径2.6m、深さ0.9m。陶器碗（13）、磁器碗（14）、箱型湯呑（15）、鉄絵皿（16）、硯（17）が出土。

土坑10 直径1.8m、深さ0.5m。

土坑11 直径2.3m、深さ0.9m。陶器碗（18）、徳利（19）、石臼（20）、磁器碗（21）、加工円盤（22）が出土。

土坑12 直径2m、深さ0.7mの円形。灯明皿（23）、煙管（24）が出土。

土坑13 直径2.3m、深さ0.6m。焼塩壺の蓋（25）が出土。

土坑14 直径1.7m、深さ0.7m。陶器碗（26）、加工円盤（27）、鉢（28）、寛永通寶（29）、鉄釘（30）が出土。鉢（28）は外面低部に「柳」の墨書が残る。

土坑15 直径2m、深さ0.7m。寛永通法（31）が出土。

溝1 幅1.2m、長さ12m、深さ0.5m。出土遺物には陶器蓋（37）、徳利（38）、丸型湯呑（32）、小杯（33）、皿（34・35）、紅皿（36）がある。（37）は軟質で鉛釉が掛けられている。

石積1 基壇の北端には、石積1が確認された。石積には直径20～40cmの自然石が用いられているが、積み方をあまり意識したものではなく様々である。一部には亀甲積と思われるものも認められる。平面及び立面の観察からは最低4回の改修が認められた。遺物の出土が少ないため判然としないが、一部は明治以降の改修の可能性もある。

埋甕1～4 溝1の北側に埋甕が4基検出された。4基とも原位置を保っている。埋甕1・2・4は上部が破損し、内部に崩落した状態であったが、埋甕3の西には礎石として使用されたと思われる、1辺14cmの、上面を水平にした礫が検出されている。また、埋甕の周囲の遺構面直上には上面が水平になるように設置されたと思われる礫が2箇所検出されており、埋甕を覆う小屋掛けがあった可能性がある。

断ち割り調査 基壇の構築方法および造営年代を知るため、石積1に対して直交するようにトレンチを設定し、断ち割り調査を行った。構築方法は場所によって微妙に異なるようで、基壇中央部から周囲に土を押し出している部分（図版3 調査区断面図23層など）と、適宜土を積み上げて概ね水平になるように盛土した部分（図版6 基壇盛土断面図29層など）が確認された。版築等の技法は使われていなかったと考えられる。

盛土のなかには破砕貝が含まれている、いわゆる混貝土層が多い。これらは食用としたものの残滓を廃棄、もしくは意図して混入させたものではなく、土を採取してきた場所に由来するものと思われる。すべて2次的な堆積であるため、悉皆的な採集、ないしはサンプリングの必要性は認められなかった。混貝土層にはハマグリ・シジミ等が多く含まれており、ごく近在から土を調達してきたものと思われる。

なお、北側の石積については数回にわたり改修が行われていることをすでに述べたが、断ち割り調査からも改修が確認できた。また、基壇造営当初は石積が施されていなかった可能性も指摘できる。

遺物は層位毎に取り上げたが、基壇造営当初に盛土したと思われる層位からの出土遺物（40～51）と、改修部分からの出土遺物（52～79）で若干時期差がみられるようである。43～45は陶胎染付の箱型湯呑で、外面体部には「柳堂御茶所」と呉須で書かれている。51は陶器播鉢で、内面に煤が付着している。一部欠損しているが、外面低部に「柳堂奥用 盛之内新調 文政七年甲口年十月口六日」と墨書された半胴（70）も出土している。

2. 通路

基壇の北側で検出された。発掘区の中央部を東西に走る。石積によって区画されていること、検出面が堅く締まっていること等から通路と判断した。

基壇とほぼ平行にまっすぐ延びているが、一部は基壇の北端の改修の影響を受けて、平面プランが変更されている可能性がある。西端には瓦が敷かれていた部分もあり、一部の瓦は北側の石積2、3の下にも続くものがある。切り合い関係となるが、出土遺物等からいずれも幕末以降と思われる。

遺物は西端の瓦敷の中から、火舎香炉と思われる陶器（80）が出土した。焼け締まりが弱い胎土が用いられ、無釉である。外面低部には小判型の「萬古」印が認められる。

3. その他

土坑16は直径1.1m、深さ0.48m、土坑17は直径1.2m、深さ0.34m。いずれも根石とも考えられる礫が埋土中に含まれている。礎石は残存していないが、北東に続く礎石建物の柱穴と思われる。

その他、調査区北半分では、石積を伴う盛土が2箇所確認された。但し、攪乱により大部分が破壊されており性格等は不明であり。盛土内の出土遺物から幕末ないしは明治以降と考えられる。

また、測量後に石積3を除去したところ、直下に井戸が検出された。井戸枠は三和土でつくられている。Ⅱ面の年代観等からこれも幕末ないしは明治以降のものと考えられる。

第2節 II面の調査

I面で検出された基壇の造成前の遺構面と思われる。発掘区の南半分では、I面で検出され基壇上の土坑の下半部が認められたのみで、遺構は検出されなかった。基壇の地業とも考え得る土層(図版3 41層など)もあるが、判然としない。

II面で検出された遺構は発掘区の北半分に集中するが、後世の小規模な開発等によって寸断されているものが多く、性格のわかるものは少なかった。以下に詳細を記す。

竈1 1m×0.9mの、東西に長辺を持つ楕円形を呈する焼土面が検出された。焼土面の東端には、竈の壁側として直径0.9mの半円形に●瓦を4個設置している。●瓦は20cm×13cm×5cmのブロック状で、火熱を受けて脆くなっている。竈は西に向かって開口しており、竈の埋土は灰白色の灰と焼土が交互に堆積していた。埋土には鉄釘(97・98)が含まれており、釘の打ち込まれた廃材を薪に使用したと思われる。その他の遺物は埋土中から陶器碗(95)、皿(96)が出土した。95は欠損が多いが、残存部分には「京都 ぎおん まち せ 五 口家 町組」と上絵付されているのが確認できる。紅皿として使用されたと考えられる。96は高台内に「来杯」と墨書されている。

竈2 直径0.9mの焼土面が確認された。焼土面の直上には灰白色の灰がごく薄く堆積していた。竈1のような構造物は検出されなかったが、中央に竈1に使用されているものと同規格のブロック状の礫が3つ検出された。遺物は銅製品(99)、鉄釘(100～106)が出土した。竈1と同様に、廃材を薪に使用したと思われる。

土坑1 直径0.75m、深さ0.15m。埋土中には焼土や炭粒が大量に含まれているうえ、釘(107)の出土もあった。竈の排土が流入している可能性が高いが、関連があるかどうかは不明である。

土坑2 長辺3.6m、短辺1.3mの楕円形で、深さ0.2mを測る。竈1、2と切り合い関係にあり、竈1、2を構築する前に掘削されたことが平面及び、断ち割り調査からわかる。埋土にも竈1、2による灰や焼土が認められ、灰等を廃棄するために事前に掘削されたものとも考えられるが、その関連は不明である。遺物は陶器碗(108)、鉄釘(109)、寛永通寶(110)等が出土している。

土坑3 直径0.5mの円形で、深さ0.2を測る。

土坑4 直径0.55mの円形で、深さ0.35mを測る。寛永通寶(111～113)が出土している。

土坑5 直径0.6mの円形で、深さ0.1mを測る。

土坑6 長辺0.8m、短辺0.5mの楕円形で、深さ0.3mを測る。

土坑7 直径1.2mの円形で、深さ0.25mを測る。陶器小坏(114)、灯明皿(115・116)が出土している。

土坑8 長辺0.9m、短辺0.7mの楕円形で、深さ0.35mを測る。磁器小坏(117)と甕(118)が出土している。

土坑9 直径0.13mの円形で、深さ0.1mを測る。

土坑10 直径0.35mの円形で、深さ0.4mを測る。

土坑11 直径0.25mの円形で、深さ0.2mを測る。

土坑12 直径0.25mの円形で、深さ0.3mを測る。なお、土坑10～12はそれぞれ1.4m間隔で直線上に並ぶこと、溝1及び石列1の延長線上にあること等から、柵列になる可能性も考えられる。

土坑13 直径0.2mの円形で、深さ0.15mを測る。

土坑14 直径0.15mの円形である。

土坑15 直径0.4mの円形で、深さ0.6mを測る。土師器皿(119)、陶器水指(120)が出土している。

土坑16 直径0.15mの円形である。

溝1 長さ0.87m、幅0.55m、深さ0.3mを測る。発掘区の西より東西方向に走る溝。北肩と南肩の一部に角礫を配する。遺物は箱型湯呑(121)、播鉢(122)、段重(123)、磁器徳利(124)が出土している。122は焼成後に底部に穿孔されている。植木鉢への転用が考えられる。

石列1 発掘区のほぼ中央部で検出された東西に延びる石列。直径約30cmの礫を10個直線的に配している。南向きの面が溝1の北肩の礫とほぼ同一線上に並んでおり、何らかの関連がある可能性がある。

集石遺構1 南北方向に延びる。北側は発掘区外となるため全形は不明である。長さ1.6m、幅0.5m。直径3cm～5cmの小礫が配されている。

集石遺構2 集石遺構1と同一線上に並ぶ。土坑2によって切られており、全形は不明。長辺0.8m、短辺0.4m。

集石遺構3 南北方向に延びる。北側は発掘区外となる。直径3cm～5cmの小礫が配されているが集石遺構1より礫の密度は薄い。長さ2.5m、幅0.5m。

集石遺構4 南北方向に延びる。集石3と同一線上に並ぶ。小礫に混じり瓦片が若干多く検出された。長さ2.7m、幅0.6m。

集石遺構5 東西方向に延びる。集石遺構4の南端から約90°東に折れた場所で検出された。東側は発掘区外に延びる。直径5cm～10cmの礫が配されている。長さ1m、幅0.5m。なお、集石遺構1～5に関してはその配置から、区画のためのものとも考えうるが性格は不明である。礫の大きさや密度、規模等で多少の違いがみられるが、礫が廃棄されたものとは考えにくいいため、何らかの遺構であると思われる。

その他、Ⅱ面掘削時に出土した遺物をⅡ面包含層出土遺物(81～94)として、特徴的なものを記す。81は赤膚焼の陶器碗で高台脇に「赤膚焼」「木白」と刻印がある。87は磁器端反碗で焼継が施されており、高台内側には朱で「柳」と記されている。90は萬古焼の急須の底部。いわゆる「型萬古」であり、ごく薄手につくられている。萬古焼についてはその他に萬古銘を持つ急須の小片も出土している。拓影のみ掲載(図版19の64)した。91の小坏と92の水注は包含層からではあるが同一地点

から出土している。91の高台裏に残るトチ跡と92の内面底部に残るトチ跡が一致すること、また釉薬も同一の淡緑色の灰釉が掛けられていること等から、重ね焼きされたものをセットとして使用していたと考えられる。

また、Ⅱ面下層出土遺物（125～138）として特徴的なものを記す。133は手づくねの土師器皿。口縁部に油煙が付着している。134は志野丸皿。底部には判読できなかったが墨書が認められる。135は鬢水入れ。軟質で鉛釉が掛けられている。

番号	層名	備考
1層	暗茶褐色土層 礫混	表土層(近年の盛土)
2層	明黄灰色砂層	表土層(近年の盛土)
3層	暗茶褐色土層 明黄砂混	表土層(近年の盛土)
4層	暗褐色土層 明黄砂少・青灰粘質 Br 混	表土層(近年の盛土)
5層	茶褐色土層 赤褐色土・焼瓦混	表土層(近年の盛土)
6層	赤褐色土層 焼土・焼瓦多混	戦災復興の層
7層	暗茶褐色土層 砂・粘質土混	I面包含層
8層	茶褐色土層 瓦混	盛土
9層	黄灰色土層 礫混	盛土
10層	暗茶褐色粘質土層 破砕貝少	Ⅱ面包含層
11層	暗茶褐色砂粘質土層 破砕貝少・炭少混	Ⅱ面包含層
12層	暗茶褐色土層 破砕貝少・炭少混	Ⅱ面包含層
13層	暗茶褐色粘質土層 破砕貝少・炭少混	Ⅱ面包含層
14層	明茶褐色土層 焼土・炭混	基壇改修層
15層	礫層	I面溝1埋土
16層	赤褐色土層	基壇改修前堆積土層
17層	茶褐色土層 炭多・破砕貝少混	基壇改修前堆積土層
18層	暗青灰色粘質土層	基壇改修層
19層	暗青灰色粘質土層 破砕貝・茶褐色砂混	基壇改修層
20層	茶褐色砂質土層 暗青灰色粘質 Br 混	基壇盛土
21層	黄灰色砂質土層 小砂利多混	基壇盛土
22層	明茶色砂質土層	基壇盛土
23層	明茶色砂質土層 青灰色還元粘質土 Br 混	基壇盛土

番号	層名	備考
24層	明茶色砂質土層 青灰色還元粘質土 Br 多混	基壇盛土
25層	明茶褐色砂質土層	基壇盛土
26層	明茶褐色土層	基壇盛土
27層	黄灰色砂質土層 小砂利多混	基壇盛土
28層	淡青灰色還元粘質土層	基壇盛土
29層	明茶褐色土層	基壇盛土
30層	明茶褐色土層 砂少・炭少混	基壇盛土
31層	明茶褐色土層 炭多混	基壇盛土
32層	明茶褐色土層 炭少・焼土粒少混	基壇盛土
33層	橙茶褐色土層 炭少混	基壇盛土
34層	炭層	基壇盛土
35層	橙茶褐色土層	基壇盛土
36層	明茶褐色砂質土層 破砕貝・炭少混	基壇盛土
37層	明茶褐色粘質土層	基壇盛土
38層	明茶褐色粘質土層 破砕貝・炭少混	基壇盛土
39層	明茶褐色粘質土層 破砕貝・炭多混	基壇盛土
40層	暗茶褐色土層 破砕貝多混	基壇盛土
41層	暗黄灰色砂質土層 破砕貝多混	基壇盛土
42層	橙褐色土層 破砕貝少混	基壇盛土
43層	暗黄灰砂層 橙褐色土層	基壇盛土
44層	暗黄灰砂層	基壇盛土
45層	暗茶褐色土層 暗青灰粘質土 Br・破砕貝少・炭多混	Ⅱ面下層
46層	暗黄灰色粘質土層 破砕貝少・礫多・炭多混	Ⅱ面下層

表1 層序一覧表（図版3層名）

第4章 まとめ

各遺構面の年代観及び、前章までに明らかになったこと等を列挙して調査のまとめとしたい。

遺構面の年代について

I面では検出された基壇は、前述したように昭和20年の桑名空襲によって焼失した法盛寺本堂の基壇である。寺伝等では、安政年間（1854～）頃に建立された本堂に伴うものとされていたが、断ち割り調査の結果は概ねそれを裏付けるものであったといえよう。基壇の北端は明治以降改修が繰り返されたようで、大規模な改修は3回確認できた。石積もその際に設けられたものと思われる。

基壇の北側に広がる盛土された遺構面は、断ち割り調査から明治以降に盛土が行われたことが判明した。その後度重なる改修を受け、桑名空襲によって被災したため、基壇と同様に昭和20年に廃絶したものと思われる。

II面は遺構出土の遺物等から19世紀半ばまで利用されていた面と思われる。上限については明確におさえられなかったが、断ち割り調査等から19世紀前半代に構築されたものと思われる。

基壇の規模について

基壇の北端、東端は調査区内で確認されたが、西端、南端は調査区外に延びるため確認できなかった。発掘調査によって全形を知ることはできなかったが、現在までにわかっていることから、当時の基壇の規模を推定してみたい。

基壇の西端は調査区外となり検出できなかったうえに、土坑13、14より西の部分は盛土の大部分が近年の攪乱（空襲後に建てられた本堂の浄化槽の抜き取り痕）を大きく受けているため、規模等の推定は困難であった。しかし、石積1が調査区西壁内にも確認できるため、基壇はさらに西に続く可能性が考えられる。

南端については発掘調査からは推定の術がなかったが、基壇の検出状況からさらに南へ続くことは明らかである。調査区の南に近年造成された墓地内の踏査を行ったところ、基壇の北端から約37mの地点に0.7mの東西にのびる段差が認められた。『桑名市史』（桑名市教育委員会、1959年）に記された本堂の規模である「方十八間」から推測したところ、この段差が南限に該当するようである。また、聞き取り調査の結果もほぼ同様であった。

「柳堂」の名称について

第1章第2節で触れているが、近世ないしはそれ以前の段階での「柳堂」の比定は、史料が少ないことや事実の誤認等から、混乱していると言わざるを得ない。今回出土した遺物のなかに「柳堂」

の比定について、新たな知見をもたらしたと思われるものがあるため紹介したい。

第3章でも一部記述したが、出土遺物のなかには「柳」あるいは「柳堂」と記されたものが少なからず存在する。例えば28の陶器鉢には高台内側に「柳」の墨書が、また、43～45、59、60の染付箱型湯呑には体部外面に呉須で「柳堂御茶所」と書かれている。70の半胴には、外面底部に「柳堂奥用 盛之内新調 文政七年甲□年十月□六日」と墨書されている。87の磁器端反碗は焼継が施されているが、高台内側に焼継を避けて、朱で「柳」と書かれている。139、149は軒丸瓦であるが、瓦当は「柳」である。

このなかで特筆されるのは43～45の「柳堂御茶所」と染付された箱型湯呑である。これらは基壇造成等の盛土中から出土しており、基壇の造成が行われたと思われる安政年間(1854～)には「柳堂」の名称が使われていた可能性が高いことを示すものである。また、70の半胴に記された墨書からは、少なくとも文政七年(1824)以降にはすでに「柳堂」の名称が用いられていたことがわかる。

「柳堂」の名称については、文献史料の面からの研究が多いが、発掘調査によってもたらされたこれらの遺物によって、さらなる検討がすすめられるものと思われる。

刻印・ヘラ書きが施された瓦について

今回の発掘調査では瓦はほぼすべての層位から出土があり、コンテナケース20箱程が採集された。瓦のなかには刻印やヘラ書きのあるものも多数認められ、近世の桑名城下町における瓦の生産及び、流通等に深く関わるとされるものもあるため、ここで若干のまとめを行いたい。

なお、刻印については紙幅の制限もあるため、すべてを掲載できていない。出土個体数とその出土位置のみ表5で明らかにした。刻印部分の残存状況が良好で、印銘が明瞭なものについては拓影(図版17～19)と観察表(表4)を掲載した。

刻印で目につくのは人名・地名等が記されているものである。人名は瓦の生産者の名前が刻印されたものが多く、図版18の1「瓦屋利左エ門」、図版18の2の「御瓦師藤原光俊 長谷川惣十郎」、3の「瓦師弥吉」、7の「瓦屋源助」、11の「瓦屋代吉」等がある。12は「御瓦製造長谷川惣十郎」と記されているが、明らかに明治以降のもので、他のものについてもそれぞれ時期差があるようである。

「御用」「勢州桑名 御瓦師 藤原正俊」と刻印された8は桑名藩ないしは公的な機関との関わりが推定できるものであり、「御瓦師」の位置付け等、興味深いものである。同時に、現存する分限帳などには記載されなかった人物の存在をも明らかにした貴重な資料でもある。

刻印のうち数量が最も多かったのは何らかの記号と考えられるものである。これらは様々な種類があるが、同範と考えられるものから残存状態の良好なものを1点抽出して採択し、表4の観察表に記した。

刻印の性格としては工人差、個体差等が考えられ、刻印された箇所等の詳細な検討が必要と思われる。出土状況からは時期差と考えることもできるため、今後供出遺物も合わせた検討が必要と思われる。

また、これらの刻印は瓦というある程度の耐久性を持ち、使用期間も比較的長く、さらに形態の変化に乏しいものの時期的な前後差を知るのに有効であると思われる。表5は右にすすむに従って下層となるように配置しているが、I面ないしはそれより上層に出土が集中するものや、II面に伴う出土が明らかなものの存在が認められる。今回は提示しないが、これらの刻印の施されている瓦の形態や、製作技法の推移と組み合わせて考えることによって、刻印のない瓦についてもある程度の前後関係が把握できる可能性がある。いずれにせよ漸次的に推移していく表5の信頼度を高めるためにはデータを増やす必要がある。桑名城下町遺跡の他地点の調査でも、同様の刻印を持つ瓦が一定量出土しており、これらも含めて今後検討していくべきと思われる。また、表5の備考に記したが、同一個体中に複数の刻印が施されているものも若干出土している。これらは異なる刻印が併存したことが実証できるとともに、刻印の前後関係を確定させていくうえで定点となる可能性をもつものである。

ヘラ書きの認められる瓦については残存状況が悪く判読できないものが多いが、刻印瓦と共通する文字を持つものや、明らかに人名と思われる「嘉助」(図版19の62)等もある。興味深い事例といえよう。

番号	図版番号	遺構面	層位 / 遺構	器種	法量 (cm)			調整・技法の特徴等
					口径	高台	器高	
1	8	I	土坑2	金属製品 銭	外径2.2、厚さ1.2、孔径0.7			寛永通寶 (新寛永)。銅。
2	8	I	土坑2	金属製品 釘	長さ4.8、幅0.4、厚さ0.3			鉄。
3	8	I	土坑3	金属製品 銭	外径2.3、厚さ1.0、孔径0.7			寛永通寶 (新寛永)。銅。
4	8	I	土坑3	金属製品 銭	外形2.2、厚さ1.4、孔径0.6			銭文不明。寛永通寶力。銅。
5	8	I	土坑3	石製品 石臼	直径32.0、高さ12.6			上臼。
6	8	I	土坑5	陶器 灯明皿	(9.8)	(4.8)	2.2	受皿。灰釉。瀬戸美濃産。
7	8	I	土坑5	磁器 加工円盤	直径2.2、厚さ0.4			磁器 (染付、肥前産) を加工。
8	8	I	土坑7	土師器 皿	-	-	-	非ロクロ。
9	8	I	土坑7	磁器 碗	(7.4)	-	-	染付。肥前産力。
10	8	I	土坑7	陶器 植木鉢	-	8.2	-	染付。瀬戸美濃産。
11	8	I	土坑7	陶器 挿鉢	-	-	-	瀬戸美濃産。
12	8	I	土坑8	陶器 火入	-	(7.4)	-	外面胴部灰釉。瀬戸美濃産。
13	8	I	土坑9	陶器 碗	-	2.9	-	灰釉。京焼系。
14	8	I	土坑9	磁器 碗	7.6	3.8	4.1	染付。肥前産力。
15	8	I	土坑9	磁器 箱型湯呑	-	-	-	染付。肥前産。
16	8	I	土坑9	陶器 皿	(11.5)	(7.0)	2.7	鉄絵皿。瀬戸美濃産。
17	8	I	土坑9	石製品 硯	幅7.8、高さ1.0			
18	8	I	土坑11	陶器 碗	10.6	3.1	3.5	京焼系力。
19	9	I	土坑11	陶器 德利	-	4.4	-	灰釉。瀬戸美濃産力。
20	9	I	土坑11	石製品 石臼	直径32.0、高さ12.5			下臼
21	9	I	土坑11	磁器 碗	-	3.8	-	染付。肥前産。くらわんか手。
22	9	I	土坑11	陶器 加工円盤	直径4.1、厚さ1.0			鉄釉の碗 (瀬戸美濃産) を加工。
23	9	I	土坑12	陶器 灯明皿	10.0	4.5	2.6	油皿。瀬戸美濃産。
24	9	I	土坑12	金属製品 煙管	長さ4.2			雁首。銅。
25	9	I	土坑13	土師器 焼塩壺蓋	7.2	7.5	1.7	
26	9	I	土坑14	陶器 碗	(8.4)	-	-	灰釉。瀬戸美濃産力。
27	9	I	土坑14	磁器 加工円盤	直径2.1、厚さ0.3			磁器 (染付、肥前産) を加工。
28	9	I	土坑14	陶器 鉢	(18.2)	(7.6)	7.0	墨書「柳…」。瀬戸美濃産。
29	9	I	土坑14	金属製品 銭	外径2.3、厚さ1.2、孔径0.6			寛永通寶 (古寛永)。銅。
30	9	I	土坑14	金属製品 釘	長さ5.4、幅0.7、厚さ0.5			鉄。
31	9	I	土坑15	金属製品 銭	外径2.5、厚さ1.2、孔径0.6			寛永通寶 (古寛永)。銅。
32	9	I	溝1	磁器 碗	(7.9)	(3.3)	5.1	染付。肥前産力。
33	9	I	溝1	磁器 小坏	(6.6)	-	-	透明釉。中国産力。
34	9	I	溝1	磁器 皿	-	(7.8)	-	染付。肥前産。
35	9	I	溝1	磁器 皿	10.0	5.5	2.6	染付。型による成形。
36	9	I	溝1	磁器 紅皿	4.7	1.2	1.6	紅付着。型による成形。肥前産。
37	9	I	溝1	陶器 蓋	2.5	1.4	1.1	軟質。鉛釉。
38	9	I	溝1	陶器 德利	3.4	-	-	灰釉。瀬戸美濃産。
39	10	I	埋葬1	炆器 甕	49.2	21.6	41.4	内面に白い付着物あり。常滑産赤物。
40	10	I	基壇盛土	陶器 椀	(10.0)	3.9	5.7	染付。内面口縁部から外面胴部にかけて鉄釉。産地不明。
41	10	I	基壇盛土	磁器 端反碗	(9.2)	(4.2)	4.9	染付。肥前産力。
42	10	I	基壇盛土	磁器 端反碗	(9.2)	-	-	染付。瀬戸美濃産力。
43	10	I	基壇盛土	陶器 箱型湯呑	7.0	3.4	5.6	陶胎染付「柳堂御茶所」。瀬戸美濃産力。
44	10	I	基壇盛土	陶器 箱型湯呑	7.0	3.0	5.6	陶胎染付「柳堂御茶所」。瀬戸美濃産力。
45	10	I	基壇盛土	陶器 箱型湯呑	-	-	-	陶胎染付「(柳) 堂御 (茶所)」。瀬戸美濃産力。
46	10	I	基壇盛土	磁器 箱型湯呑	-	-	-	陶胎染付。瀬戸美濃産。
47	10	I	基壇盛土	磁器 丸型湯呑	(7.6)	3.3	5.0	染付。瀬戸美濃産。
48	10	I	基壇盛土	磁器 蓋	(9.0)	3.6	3.1	染付。肥前産。
49	11	I	基壇盛土	陶器 土瓶	-	9.0	-	鉄釉。瀬戸美濃産。
50	11	I	基壇盛土	磁器 仏飯具	-	4.1	-	染付。肥前産力。
51	11	I	基壇盛土	陶器 挿鉢	31.5	14.2	12.4	内側煤付着。瀬戸美濃産。
52	11	I	基壇盛土 (改修)	土師器 高坏	-	-	-	透孔あり。
53	11	I	基壇盛土 (改修)	陶器 山茶碗	-	-	-	東海地方南部系。
54	11	I	基壇盛土 (改修)	土師器 焙烙	(18.4)	-	-	外面煤付着。
55	11	I	基壇盛土 (改修)	磁器 碗	(10.2)	3.9	6.3	染付。肥前産。
56	11	I	基壇盛土 (改修)	磁器 碗	(8.9)	(3.8)	5.2	染付。肥前産。
57	11	I	基壇盛土 (改修)	磁器 碗	(9.5)	3.7	4.3	染付。肥前産。くらわんか手。
58	11	I	基壇盛土 (改修)	磁器 箱型湯呑	6.6	3.3	5.7	染付。肥前産。
59	11	I	基壇盛土 (改修)	磁器 箱型湯呑	(7.5)	(3.0)	5.7	陶胎染付「柳堂 (御茶所)」。瀬戸美濃産力。
60	11	I	基壇盛土 (改修)	磁器 箱型湯呑	(6.6)	-	-	陶胎染付「(柳) 堂御 (茶所)」。瀬戸美濃産力。
61	11	I	基壇盛土 (改修)	磁器 箱型湯呑	(6.8)	(3.6)	5.9	陶胎染付。瀬戸美濃産。
62	12	I	基壇盛土 (改修)	磁器 丸型湯呑	(7.0)	3.1	4.9	染付。瀬戸美濃産。
63	12	I	基壇盛土 (改修)	磁器 丸型湯呑	-	3.3	-	染付。瀬戸美濃産。
64	12	I	基壇盛土 (改修)	磁器 丸型湯呑	-	-	-	染付。瀬戸美濃産。
65	12	I	基壇盛土 (改修)	磁器 蕎麦猪口	(7.5)	(5.8)	6.0	染付。瀬戸美濃産。
66	12	I	基壇盛土 (改修)	磁器 蓋	(10.0)	5.6	2.9	染付。肥前産。
67	12	I	基壇盛土 (改修)	磁器 皿	(6.7)	(4.0)	1.1	型による成形。輸入。
68	12	I	基壇盛土 (改修)	磁器 皿	9.2/6.6	4.7/3.9	2.2	染付。型による成形。肥前産 (法量:長軸 / 短軸)
69	12	I	基壇盛土 (改修)	陶器 灯明皿	(8.8)	(3.8)	2.0	受皿。瀬戸美濃産。
70	12	I	基壇盛土 (改修)	陶器 半胴	-	14.6	-	墨書「柳堂奥用 盛之内新調 文政七年甲口年 十月口六日」。瀬戸美濃産。
71	12	I	基壇盛土 (改修)	陶器 德利	-	10.6	-	灰釉。瀬戸美濃産。

表2 遺物一覧表 (1)

番号	図版番号	遺構面	層位 / 遺構	器種	法量 (cm)			調整・技法の特徴等
					口径	高台	器高	
72	12	I	基壇盛土 (改修)	陶器 蓋	5.8	4.4	1.6	内面鉄釉。瀬戸美濃産。
73	12	I	基壇盛土 (改修)	陶器 水注	10.8	8.1	9.5	灰釉。墨書「リケ」。瀬戸美濃産。
74	12	I	基壇盛土 (改修)	磁器 植木鉢	(8.2)	(5.7)	6.6	染付。「●」「有」「菊」「有」。三足。瀬戸美濃産。
75	12	I	基壇盛土 (改修)	磁器 加工円盤	直径1.8、厚さ0.2			磁器 (染付、焼継あり、肥前産) を加工。
76	12	I	基壇盛土 (改修)	磁器 加工円盤	直径2.0、厚さ0.6			磁器 (染付、肥前産、くらわんか手) を加工。
77	13	I	基壇盛土 (改修)	炆器 甕	-	-	-	常滑産。真焼。
78	13	I	基壇盛土 (改修)	石製品 石臼	直径33.0、高さ5.2			下臼。
79	13	I	基壇盛土 (改修)	金属製品 銭	外径2.4、厚さ1.6、孔径0.7			熙寧通寶 (北宋銭)。銅。
80	13	I	通路	陶器 火舎香炉	-	(14.1)	-	萬古焼。「萬古」印銘。図版19-63。
81	13	II	包含層	陶器 碗	(12.1)	4.4	7.0	赤膚焼。「赤膚山」「木白」印銘。図版19-65。
82	13	II	包含層	磁器 碗	7.4	3.1	6.1	染付。
83	13	II	包含層	磁器 箱型湯呑	(7.4)	(3.4)	5.0	染付。肥前産。
84	13	II	包含層	磁器 箱型湯呑	(6.8)	-	-	染付。陶胎。瀬戸美濃産。
85	13	II	包含層	磁器 箱型湯呑	6.7	3.4	5.4	染付。
86	13	II	包含層	磁器 箱型湯呑	-	(3.4)	-	染付。陶胎。瀬戸美濃産。
87	13	II	包含層	磁器 端反碗	8.4	3.3	4.6	染付。焼継あり。高台内に朱で「柳」とあり。産地不明。
88	13	II	包含層	磁器 蓋	7.9	3.4	2.7	染付。瀬戸美濃産。
89	14	II	包含層	陶器 灯明皿	9.5	4.2	2.4	受皿。鉄釉。瀬戸美濃産。
90	14	II	包含層	陶器 急須	-	5.6	-	萬古焼 (型萬古)。
91	14	II	包含層	陶器 小坏	4.8	2.4	4.9	灰釉。92と重ね焼き。瀬戸美濃産。
92	14	II	包含層	陶器 水注	(6.6)	5.3	7.5	灰釉。91と重ね焼き。瀬戸美濃産。
93	14	II	包含層	陶器 鳥型水滴	長さ7.0、幅4.3、高さ4.9			瀬戸美濃産。灰釉。
94	14	II	包含層	瓦 加工円盤	直径6.7、厚さ2.0			
95	14	II	竈1	磁器 碗	(9.8)	-	-	染付。朱字「京都」「ぎおん」「まち」「せ」「五」「口家」「口町組」。高台打ち欠き。肥前産。
96	14	II	竈1	磁器 皿	13.6	6.4	3.7	染付。墨書「来」「杯」。瀬戸美濃産。
97	14	II	竈1	金属製品 釘	長さ8.8、幅0.5、厚さ0.5			鉄。
98	14	II	竈1	金属製品 釘	長さ8.5、幅0.4、厚さ0.4			鉄。
99	14	II	竈2	金属製品	長さ14.0、幅0.6、厚さ0.3			銅。
100	14	II	竈2	金属製品 釘	長さ6.0、幅0.3、厚さ0.3			鉄。
101	14	II	竈2	金属製品 釘	長さ6.1、幅0.5、厚さ0.5			鉄。
102	14	II	竈2	金属製品 釘	長さ4.1、幅0.3、厚さ0.3			鉄。
103	14	II	竈2	金属製品 釘	長さ6.1、幅0.7、厚さ0.7			鉄。
104	14	II	竈2	金属製品 釘	長さ5.0、幅0.4、厚さ0.4			鉄。
105	14	II	竈2	金属製品 釘	長さ6.0、幅0.3、厚さ0.3			鉄。
106	14	II	竈2	金属製品 釘	長さ5.2、幅0.5、厚さ0.5			鉄。
107	14	II	土坑1	金属製品 釘	長さ9.5、幅0.3、厚さ0.3			鉄。
108	14	II	土坑2	陶器 碗	-	(4.6)	-	白化粧。刷毛目文様。肥前産。
109	14	II	土坑2	金属製品 釘	長さ5.5、幅0.4、厚さ0.4			鉄。
110	15	II	土坑2	金属製品 銭	外径2.5、厚さ1.6、孔径0.6			寛永通寶 (新寛永、文銭)。銅。
111	15	II	土坑4	金属製品 銭	外径2.4、厚さ1.3、孔径0.6			寛永通寶 (古寛永)。銅。
112	15	II	土坑4	金属製品 銭	外形2.3、厚さ1.1、孔径0.6			寛永通寶 (古寛永)。銅。
113	15	II	土坑4	金属製品 銭	外形2.4、厚さ1.3、孔径0.5			寛永通寶 (古寛永)。銅。
114	15	II	土坑7	磁器 小坏	-	3.6	-	染付。瀬戸美濃産。
115	15	II	土坑7	陶器 灯明皿	(10.4)	(4.4)	1.8	油皿。鉄釉。瀬戸美濃産。
116	15	II	土坑7	陶器 灯明皿	(10.5)	(5.2)	2.2	受皿。瀬戸美濃産。
117	15	II	土坑8	磁器 小坏	5.6	3.7	6.4	染付。外面黄土色の釉。産地不明。
118	15	II	土坑8	炆器 甕	-	-	-	常滑産。
119	15	II	柱穴7	土師器 皿	(7.3)	-	-	非ロクロ。
120	15	II	柱穴7	陶器 水指	12.8	-	-	鉄釉。瀬戸美濃産。
121	15	II	溝1	磁器 箱型湯呑	-	-	-	陶胎染付。瀬戸美濃産。
122	15	II	溝1	陶器 播鉢	-	(19.3)	-	底部穿孔。瀬戸美濃産。
123	15	II	溝1	陶器 段重	6.8	4.7	3.8	灰釉。
124	15	II	溝1	磁器 德利	-	(5.5)	-	染付。肥前産。
125	15	III	包含層	磁器 碗	11.7	4.9	5.9	染付。肥前産。
126	15	III	包含層	磁器 碗	-	-	-	染付。肥前産。
127	15	III	包含層	磁器 箱型湯呑	(7.1)	(3.1)	5.2	陶胎染付。瀬戸美濃産。
128	15	III	包含層	磁器 箱型湯呑	(7.5)	-	-	染付。肥前産。
129	15	III	包含層	磁器 箱型湯呑	-	-	-	染付。肥前産。
130	15	III	包含層	磁器 箱箱湯呑	-	-	-	染付。肥前産。
131	15	III	包含層	土師器 皿	(12.3)	(7.5)	1.8	非ロクロ。
132	15	III	包含層	土師器 皿	(10.5)	-	-	非ロクロ。
133	15	III	包含層	土師器 皿	(10.3)	(6.2)	1.8	内外面口縁部油煙付着。
134	15	III	包含層	陶器 皿	(12.9)	7.4	2.5	墨書。灰釉。瀬戸美濃産。
135	16	III	包含層	陶器 鬚水入れ	-	-	3.2	軟質。鉛釉。
136	16	III	包含層	陶器 水注	(7.4)	(6.2)	8.7	鉄釉。瀬戸美濃産。
137	16	III	包含層	金属製品 銭	外径2.5、厚さ1.3、孔径0.6			寛永通寶 (新寛永)。銅。
138	16	III	包含層	金属製品 銭	外径2.3、厚さ1.2、孔径0.7			寛永通寶 (新寛永)。銅。
139	16	表採		瓦 軒丸瓦	瓦当直径18.7、瓦当厚さ2.3			柳文。へら書きあり。
140	16	表採		瓦 軒丸瓦	瓦当直径18.7、瓦当厚さ2.3			柳文。
64	19	II	包含層	陶器 急須	-	-	-	「萬古」印銘。萬古焼。

表3 遺物一覧表 (2)

番号	図版番号	遺構面	層名 / 遺構	備考
1	17		表採	「勢州」「四日市」「瓦屋利左エ門」
2	17		表採	「桑名」「長谷川惣十郎」「御瓦師」「藤原光榮」
3	17	I面-b	戦災復興層	「東日野」「口上無類仕入」「瓦師弥吉」
4	17	I面	石積1	「御堂」
5	17	II面-不明	戦災復興層	「世和人」「山一色村」「西脇嘉口」
6	17	II面-c	戦災復興層	「世和人」「山一色」「西脇嘉口」
7	17	II面-不明	戦災復興層	「勢州」「瓦屋源助」「桑名」
8	17	II面-a	戦災復興層	「御用」「勢州桑名」「御瓦師」「藤原正俊」
9	17	II面-不明	戦災復興層	「千徳」
10	17		表採	「曾井村」「小生村」「小山村」「七津屋胸」「真同行」
11	17		表採	「三州」「瓦屋代吉」「新川」
12	17		表採	「大日本」「御瓦製造」「長谷川惣十郎」
13	17		表採	「三州」「高浜」「42」
14	17		表採	「又」
15	17		表採	「二号」
16	17		表採	「口三」
17	17		表採	「大」
18	17		表採	「上」
19	17		表採	
20	17		表採	
21	17		表採	
22	17		表採	「大」
23	17	I面	表土層	「山」
24	17	I面	表土層	
25	17	I面-a	戦災復興層	
26	17	I面-b	戦災復興層	
27	17	I面-a	戦災復興層	
28	17	I面-a	戦災復興層	
29	17	I面-b	戦災復興層	
30	17	I面-不明	戦災復興層	
31	17	I面-b	戦災復興層	
32	17	I面-a	戦災復興層	
33	17	I面-b	戦災復興層	「一」
34	17	埋甕1	戦災復興層	「元」
35	17	I面-不明	戦災復興層	
36	17	I面	基壇盛土(改修)	
37	17	I面	基壇盛土(改修)	
38	17	I面	土坑5	
39	17	I面	石積1	
40	17	I面	石積下の井戸	
41	18	II面-不明	包含層	「州桑名」「御瓦師」
42	18	II面-a	包含層	「仁哉」
43	18	II面-a	包含層	「仁」
44	18	II面-b	包含層	「口三」
45	18	II面-b	包含層	「せ」
46	18	II面-不明	包含層	字。不明。
47	18	II面-不明	包含層	「二力」
48	18	II面-b	包含層	字。不明。
49	18	II面-b	包含層	「深」
50	18	II面-b	包含層	不明。
51	18	II面-b	包含層	不明。
52	19	II面-不明	包含層	「三郎兵衛」
53	19	II面	土坑2	字。不明。
54	19	II面	土坑2	「ろ九」
55	19	II面	土坑2	「巾」
56	19	II面	土坑5	「千」
57	19	II面下層-b		不明。
58	19	II面下層-b		「一」
59	19		排土	不明。
60	19		排土	字。不明。
61	19	II面-不明	包含層	不明。
62	19		排土	「嘉助」

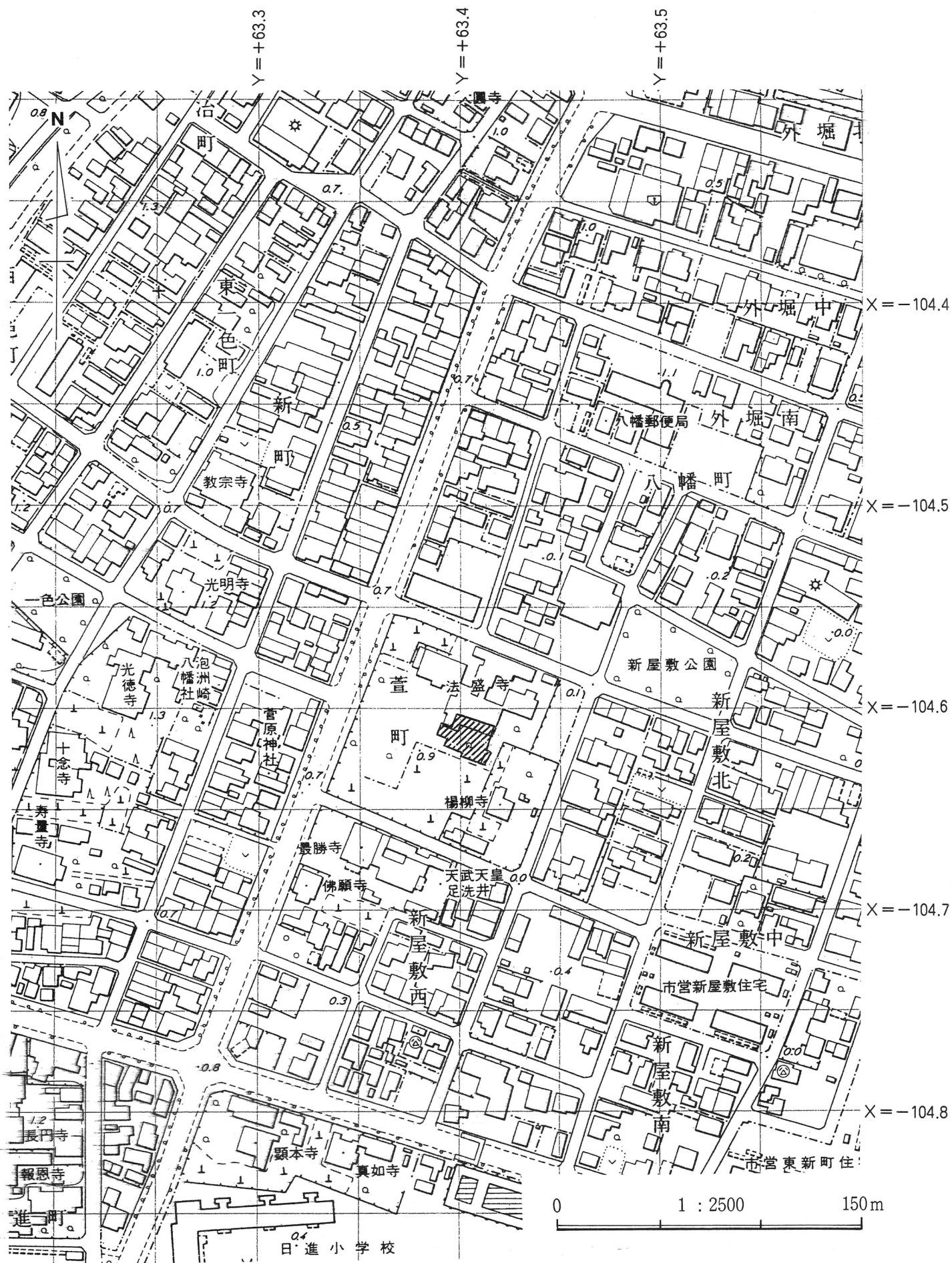
表4 刻印瓦観察表

表採層	表土層	戦災復興層			I 面遺構										II 面包含層				II 面遺構			II 面下層		不明	備考			
		不明	不明	不明	基壇盛土(改修)	土坑5	土坑13	土坑14	埋甕1	溝1	石積1	石積2	石積3	通路瓦敷	石積下の井戸	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明						
1	1																											
2	1																											
3	1																											10と45と併存あり
4	1																											
5	1				1																							17と併存あり
6					1																							
7	1			1								1																
8	6	4		3	7	1		1		3	1	1					3	2									4	
9																												
10	4	1		1	1						1						10	1	1			3					3	3と45、18、38と併存あり
11																												1
12																												1
13			1																									
14					1																							
15				1																								
16			1																									
17	1																											5と併存あり
18		1																										10と併存あり
19				1																								
20										1																		
21					1			1																				
22																				1								
23				1															1									
24																			1									
25																			2									
26			1															2	6									
27						1											1	1										
28												1								1								
29												1								3								1
30																				2	2							1
31					1											1	4	3		1		1						
32																				2								1
33																										1		
34				1																1							1	
35				1							1									1	2						1	
36																						1					1	
37					1												3	3									1	
38										1			1	1						1			1				1	10と併存あり
39																										1		
40			1	1																							1	
41	1																											
42	1																											
43	1																											3と10と併存あり
44	1																											
45	1																											
46	1																											
47	1																											
48	1																											
49				1																								
50				1																								
51					1																							
52						1																						
53																												
54																												
55																												
56																												
57																												
58																												
59																												
60																												
61																												
62																												1

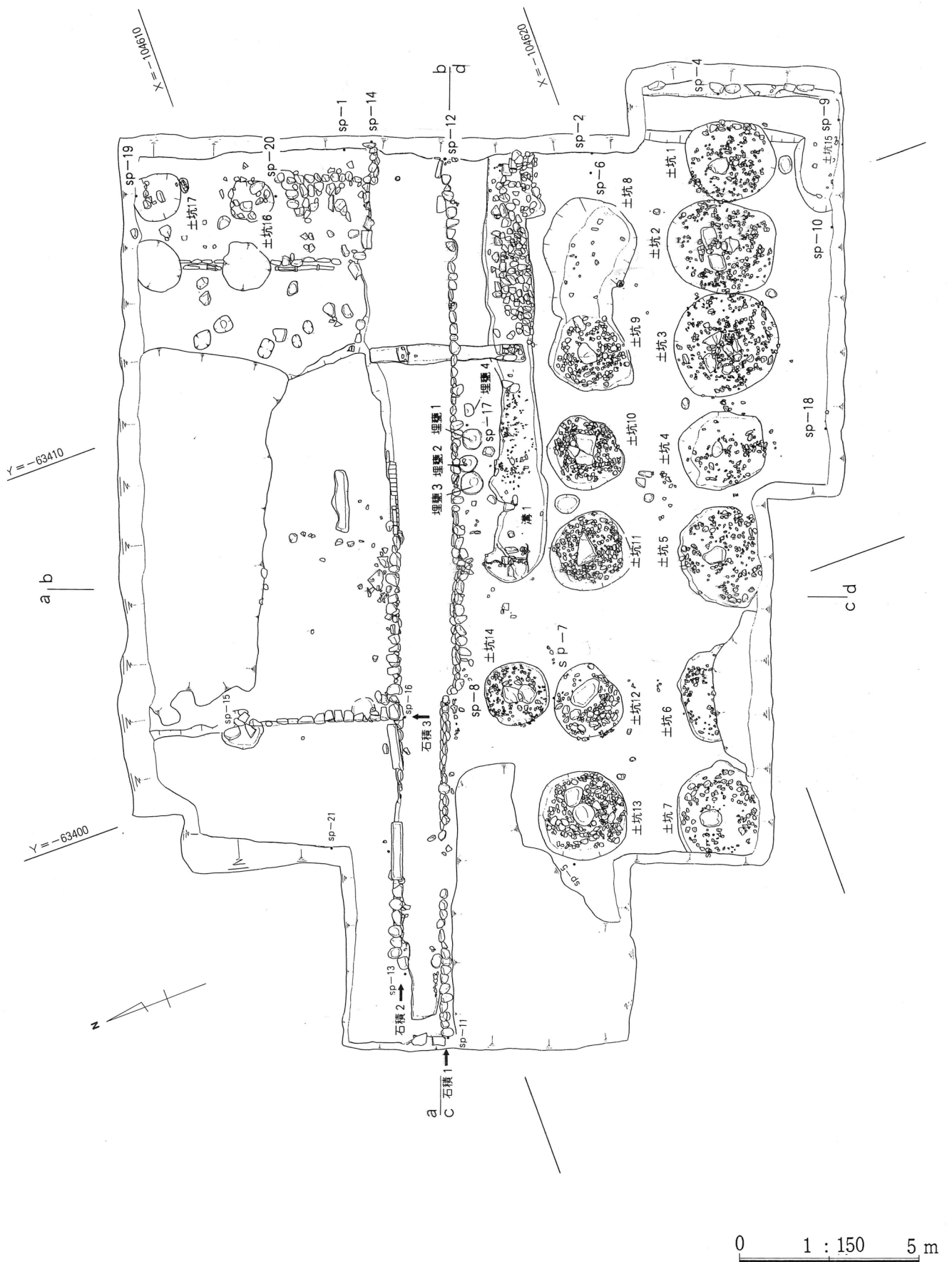
同一個体上に複数の刻印が併存したものとその出土位置。

- 表採 3と10と45、5と17
- 表土層 10と18
- II面土坑2 10と38

表5 刻印瓦出土位置一覧表

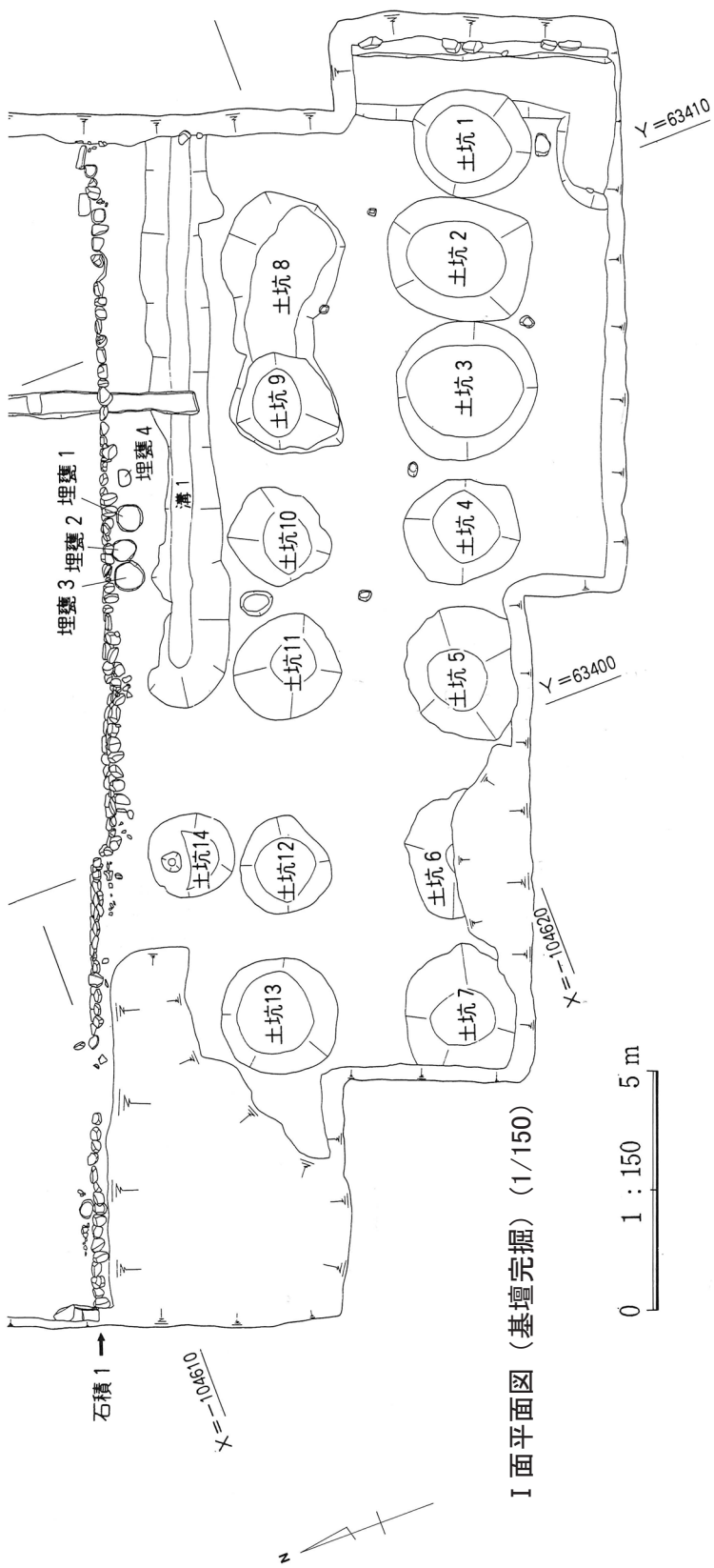


図版1 調査区位置図 (1/2500)



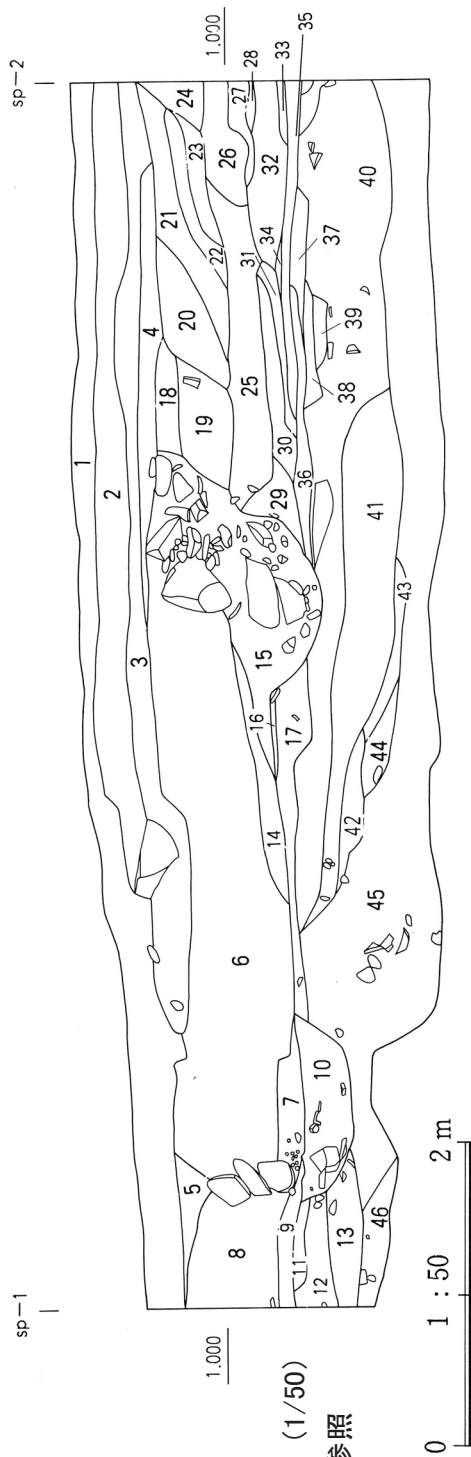
图版2 I面遺構図 (1/150)

图版3 I面遺構図



I面平面図 (基壇完掘) (1/150)

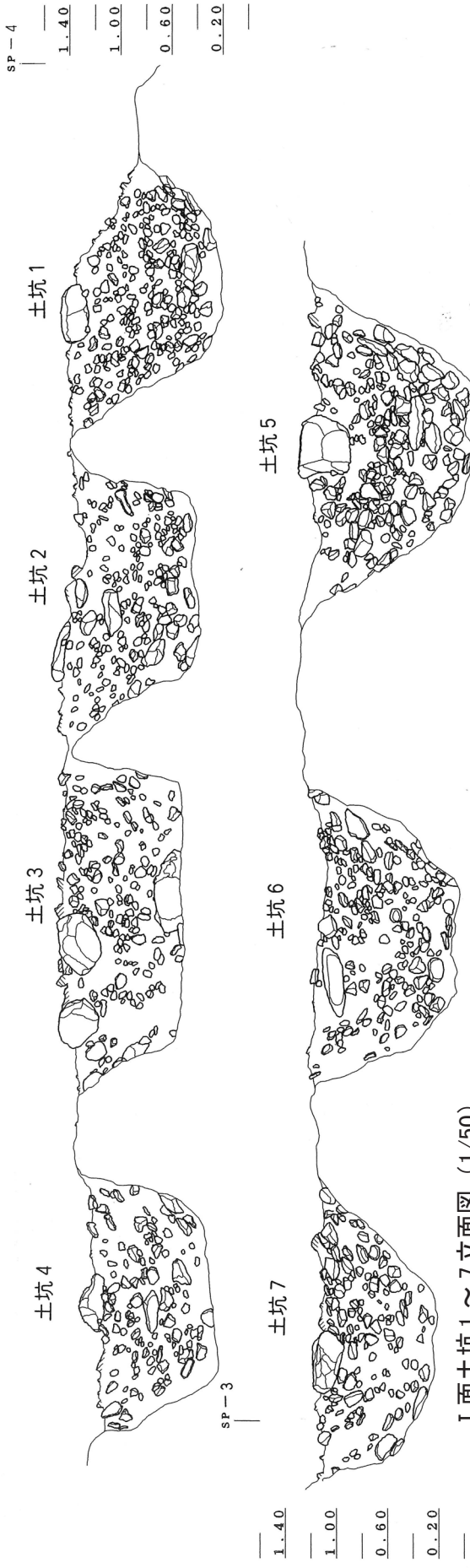
0 1 : 150 5 m



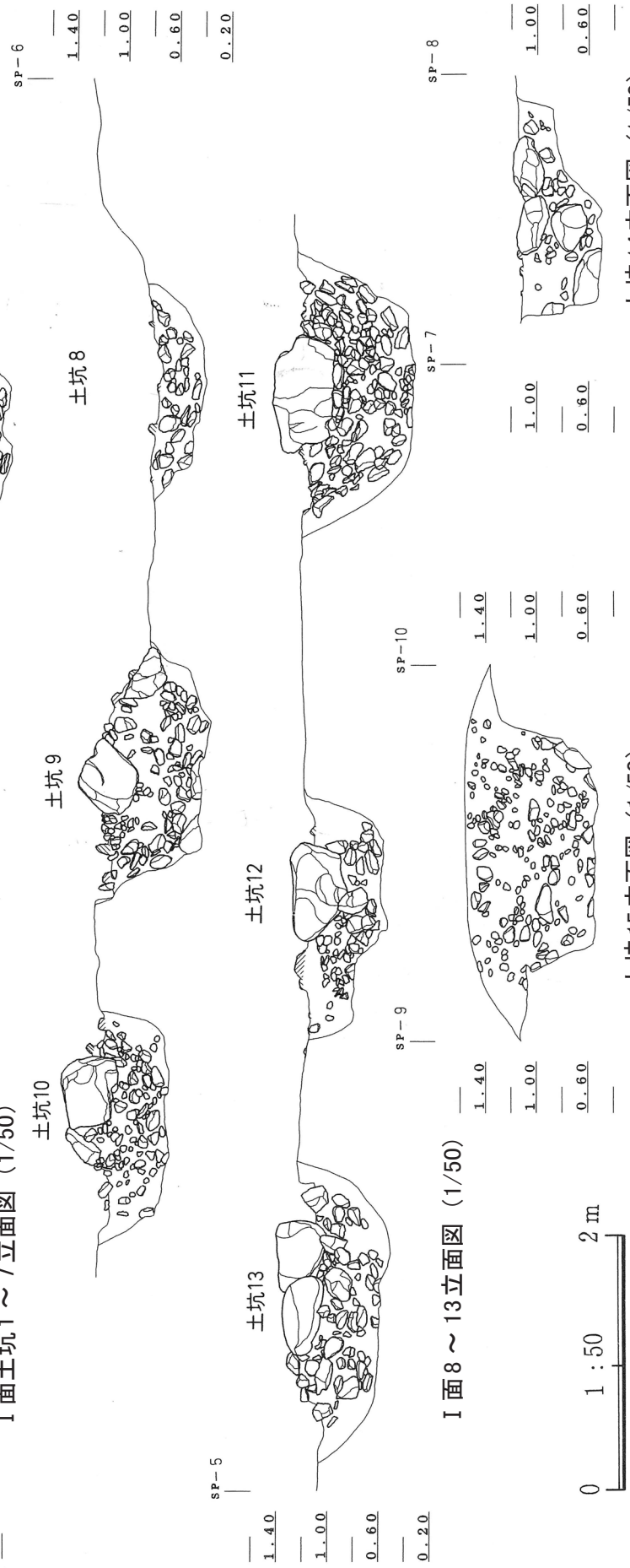
調査区東壁断面図 (1/50)

層名は表1を参照

0 1 : 50 2 m



I面土坑1~7立面图 (1/50)



I面8~13立面图 (1/50)

土坑14立面图 (1/50)

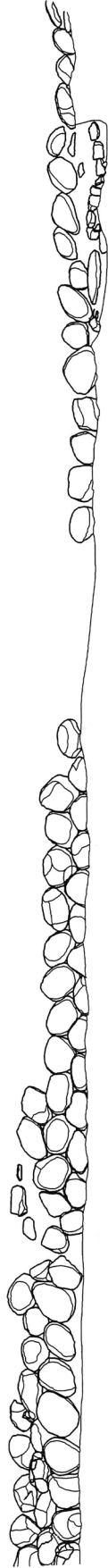
土坑15立面图 (1/50)

图版4 I面 基壇土坑立面图 (1/50)

SP-11
 1.40
 1.00
 0.60

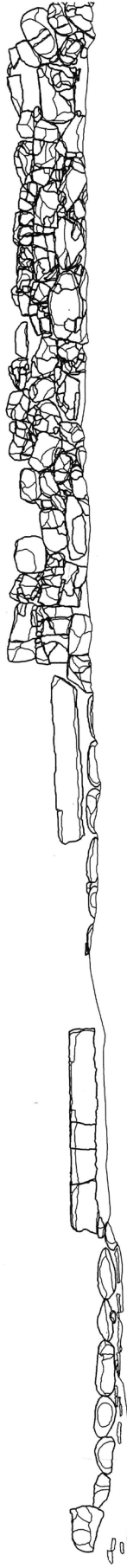


SP-12
 1.40
 1.00
 0.60



石積1立面図 (1/50)

SP-13
 1.40
 1.00
 0.60



SP-14
 1.40
 1.00
 0.60



石積2立面図 (1/50)

SP-15
 1.40
 1.00
 0.60



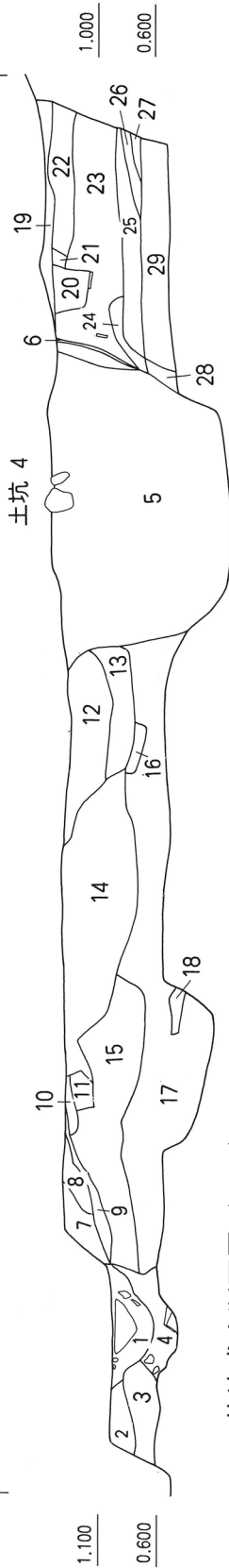
SP-16
 1.40
 1.00
 0.60



石積3立面図 (1/50)

0 1 : 50 2 m

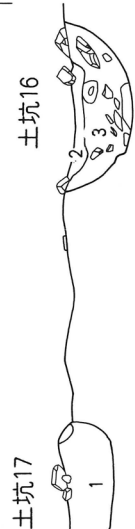
sp-17



基壇盛土断面图 (1/50)

- 1 暗茶褐色土層 礫 (直径1~40cm) 多・炭・破砕貝小片少・瓦混
- 2 暗茶褐色土層 燒土・炭・破砕貝混
- 3 茶褐色土層 炭褐色粘土ブロック (直径約10cm)
- 4 炭・破砕貝・燒土・瓦混
- 5 炭褐色土層 礫 (直径1~20cm) 多・炭・破砕貝混
- 6 黄灰色粘質土層
- 7 茶褐色砂層
- 8 黑褐色土層 破砕貝・瓦・礫 (直径3~10cm) 混
- 9 橙褐色砂層 礫 (直径0.5~2cm) 多混
- 10 赤褐色土層 炭多混 炭熱
- 11 黄褐色粘質土層
- 12 黄褐色粘質土層
- 13 黄褐色砂層 礫 (直径0.5~1cm 多・10cm 少) 混
- 14 茶褐色土層 破砕貝 (ハマグリ・シジミ等) 多・炭・礫 (0.5~5cm) 多・瓦混
- 15 灰茶褐色土層 炭・破砕貝・燒土少・礫 (直径1~4cm) 少混
- 16 灰色砂層
- 17 茶褐色土層 炭少・礫 (直径1~3cm) 少・破砕貝微混
- 18 明黄褐色砂質土層 礫 (直径0.1~2cm) 多混
- 19 黄灰色粘質土層
- 20 暗茶褐色土層 破砕貝混
- 21 黄褐色土層 礫 (直径0.5~3cm)
- 22 茶褐色砂層 礫 (直径0.5~3cm)
- 23 炭褐色粘質土層 炭少混
- 24 灰色粘土層
- 25 灰褐色砂質土層 礫 (直径5~10cm) 多混
- 26 茶褐色砂層 礫 (直径0.1~0.5cm) 混
- 27 橙褐色砂層 礫 (直径0.1~0.5cm) 少混
- 28 青灰色粘質土層 礫 (直径0.1~0.5cm) 少混
- 29 茶褐色砂層

sp-19

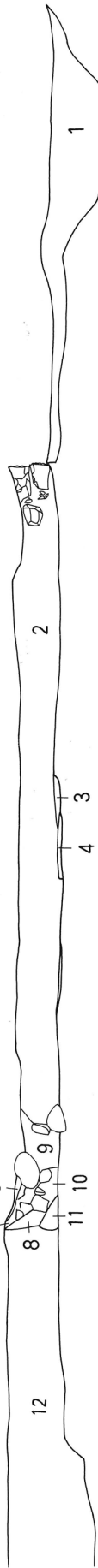


土坑16・17 断面图 (1/50)

- 1 茶褐色土 燒砂・礫 (直径10~15cm) 混
- 2 茶褐色土層 小破砕貝少痕
- 3 黑褐色土層 破砕貝少・炭・礫 (直径10~40cm) 多混

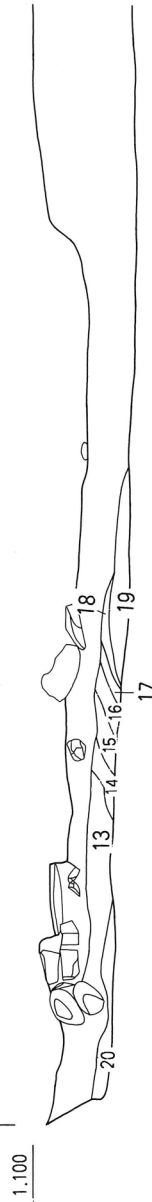
— 23 —

sp-21



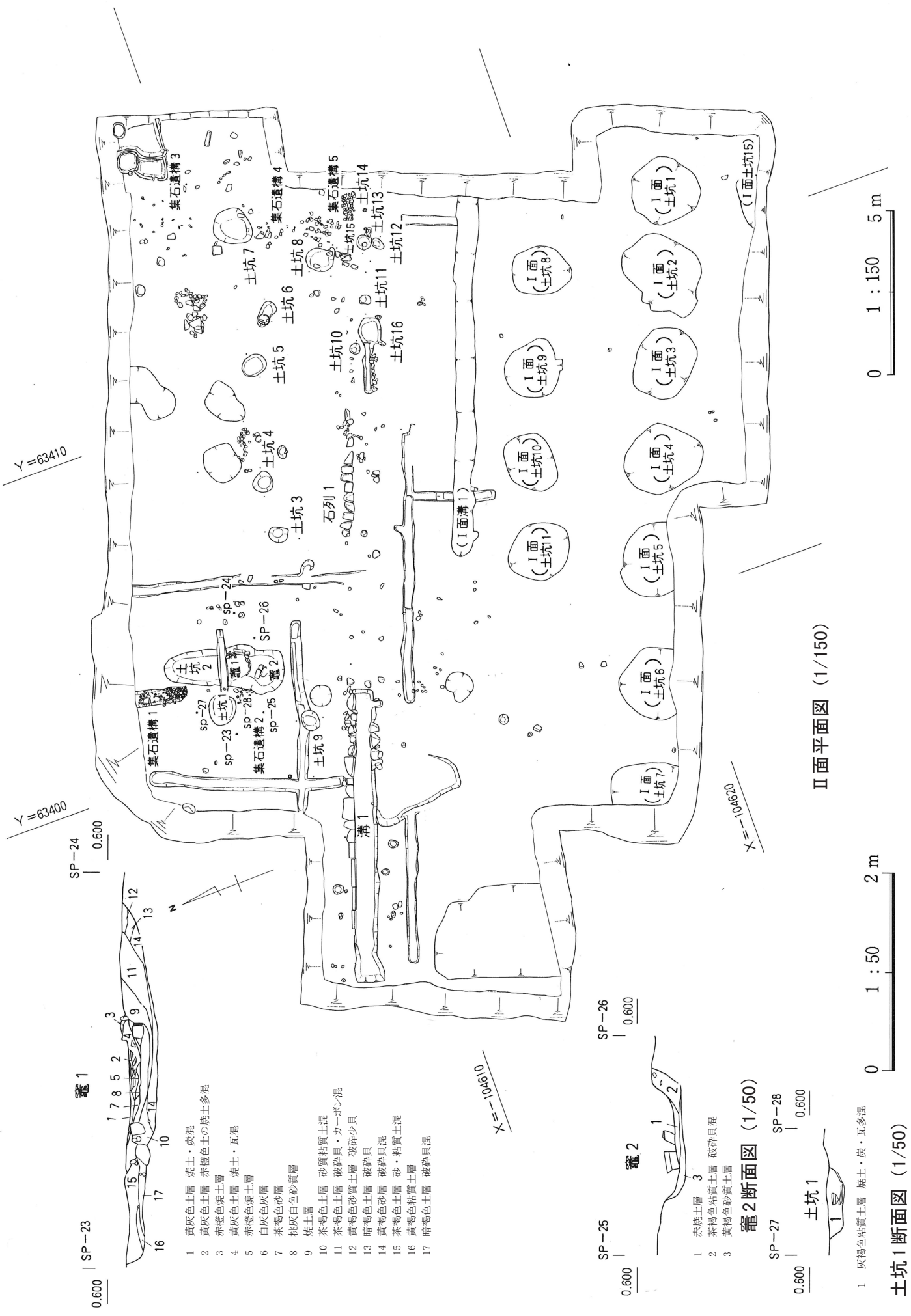
- 1 茶褐色土層
- 2 黑褐色土層 貝 (ハマグリ・シジミ・サルボウ・カキ)・炭混
- 3 黄灰色粘質土層
- 4 橙色砂層
- 5 赤茶褐色土層 礫・燒瓦・炭混
- 6 暗灰色粘土層 破砕貝少混
- 7 赤褐色土層 破砕貝少・礫混
- 8 暗灰色粘土層
- 9 赤褐色土層 燒土・燒瓦・炭少・破砕貝少混
- 10 暗青灰色粘土層
- 11 青灰色粘土層
- 12 茶褐色土層 礫 (直径3~10cm) 少・破砕貝少混
- 13 黄褐色土層 炭・破砕貝混
- 14 黄褐色粘質土層 炭混
- 15 黑灰色粘質土層
- 16 茶褐色土層 砂・微細破砕貝混
- 17 黑褐色土層
- 18 暗茶褐色土層 細炭混
- 19 明茶褐色砂質土層 礫 (直径0.5~1cm) 多・破砕貝・瓦多混
- 20 黄灰色粘質土層

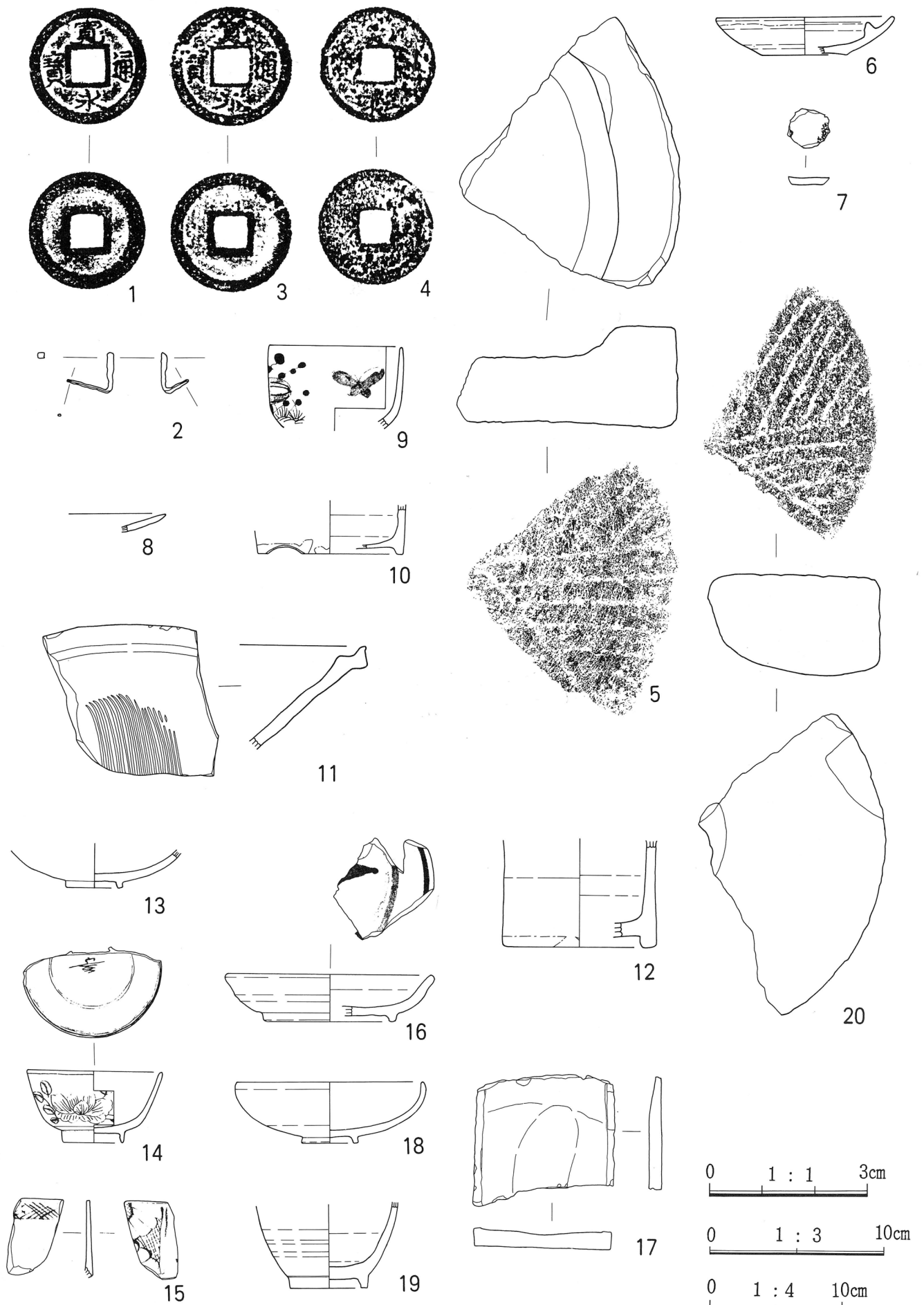
sp-1



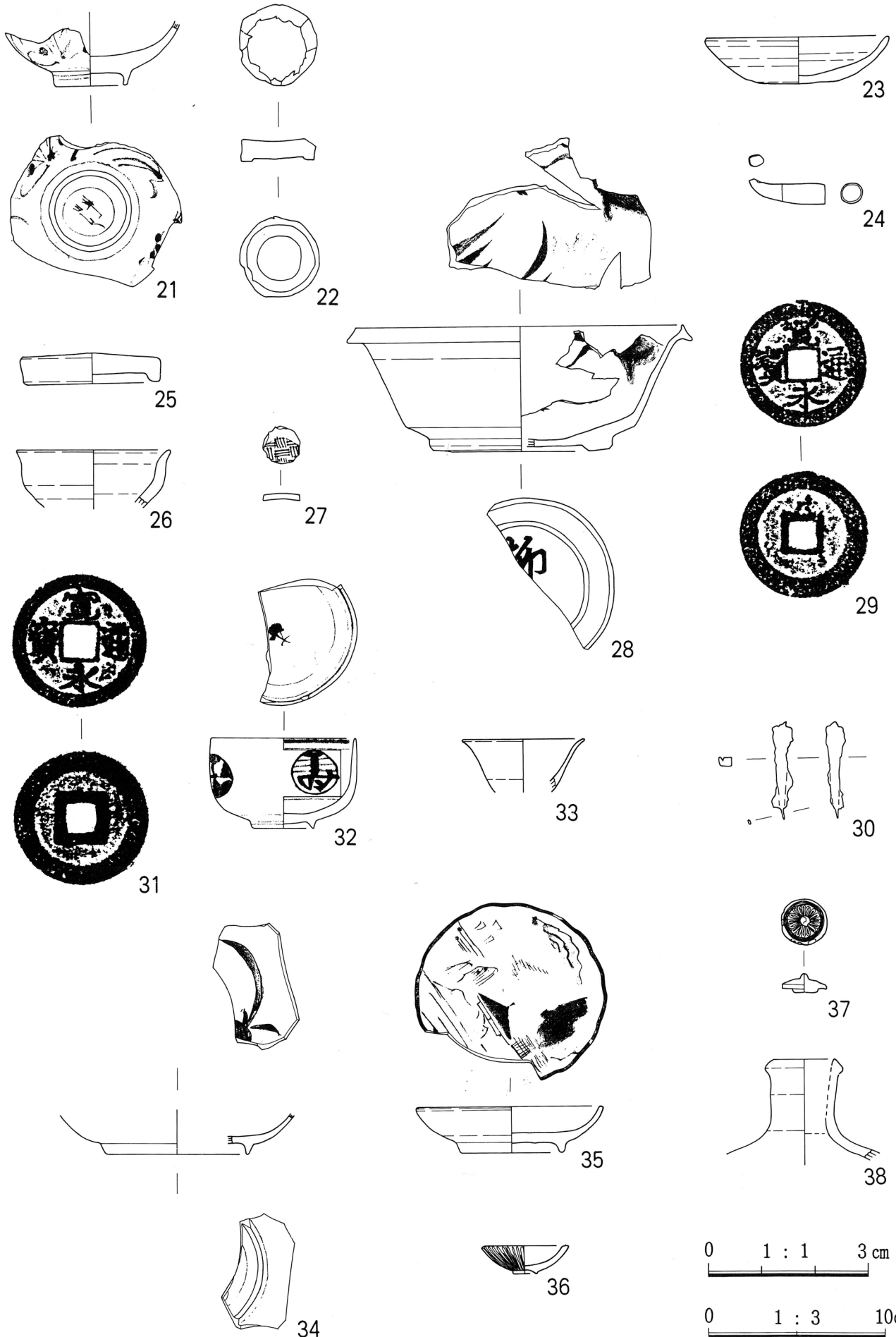
盛土断面图 (1/50)

図版7 II面遺構図

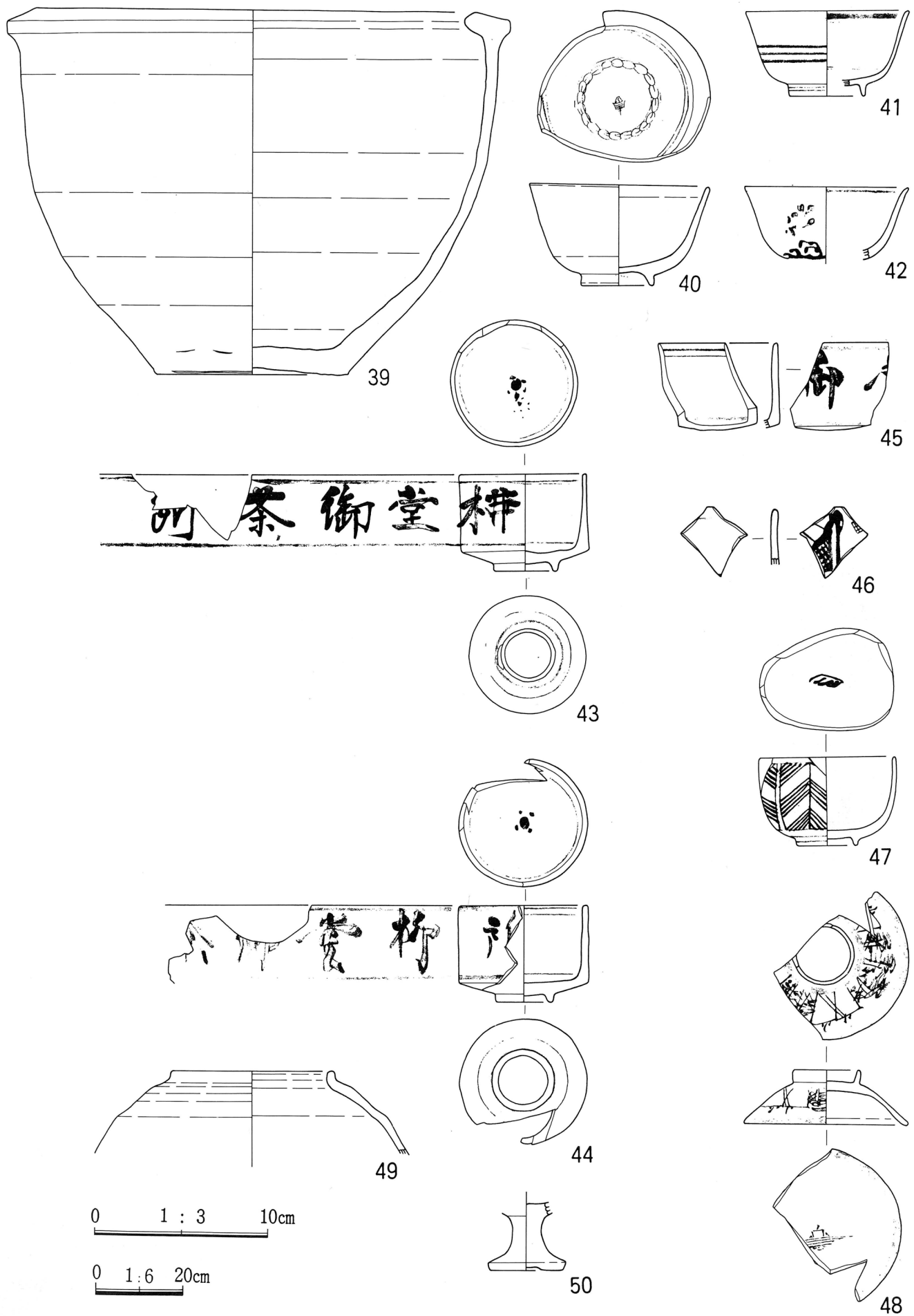




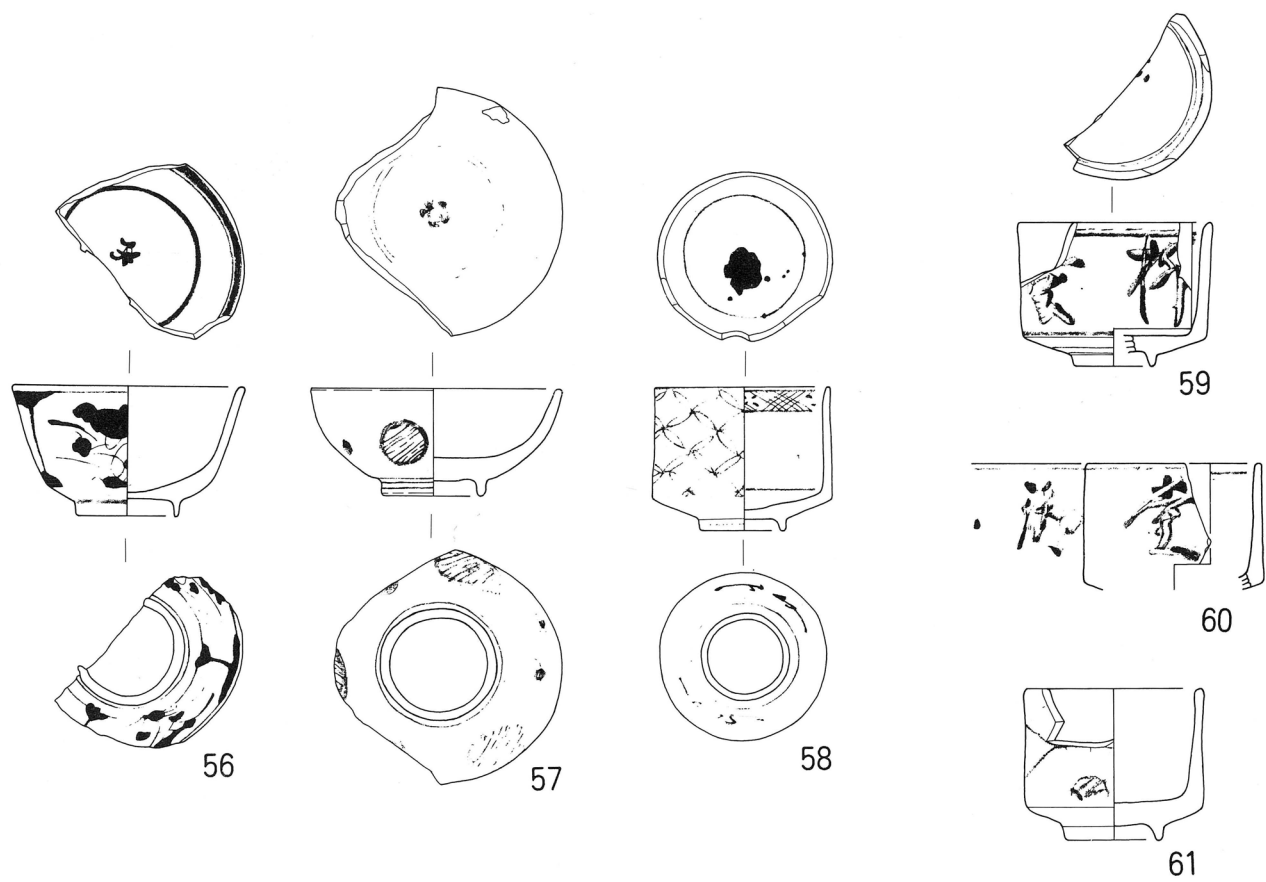
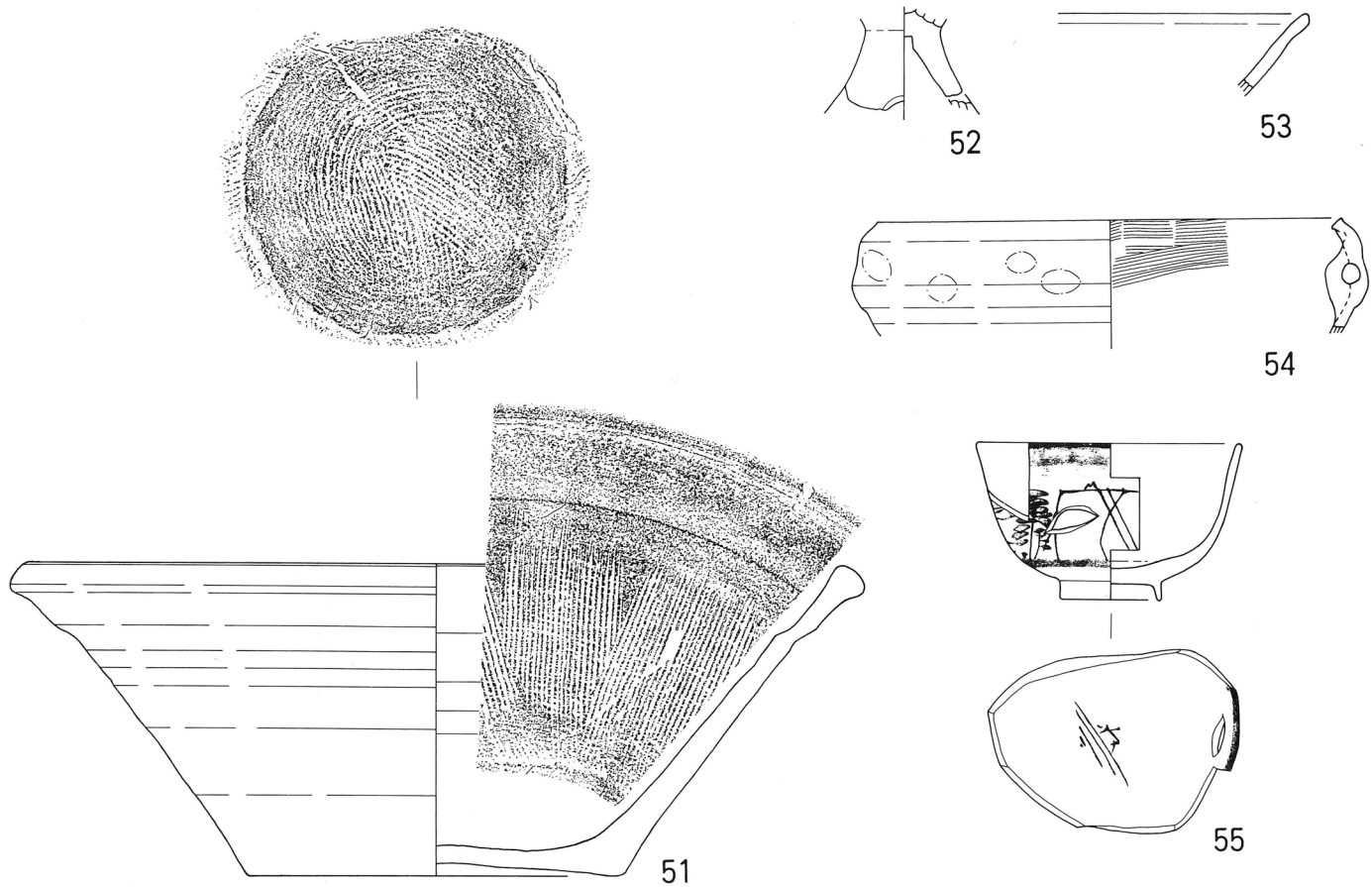
図版8 遺物実測図 (1・3・4は原寸、5・20は1/4、他は1/3)



図版9 遺物実測図 (29・31は原寸、他は1/3)

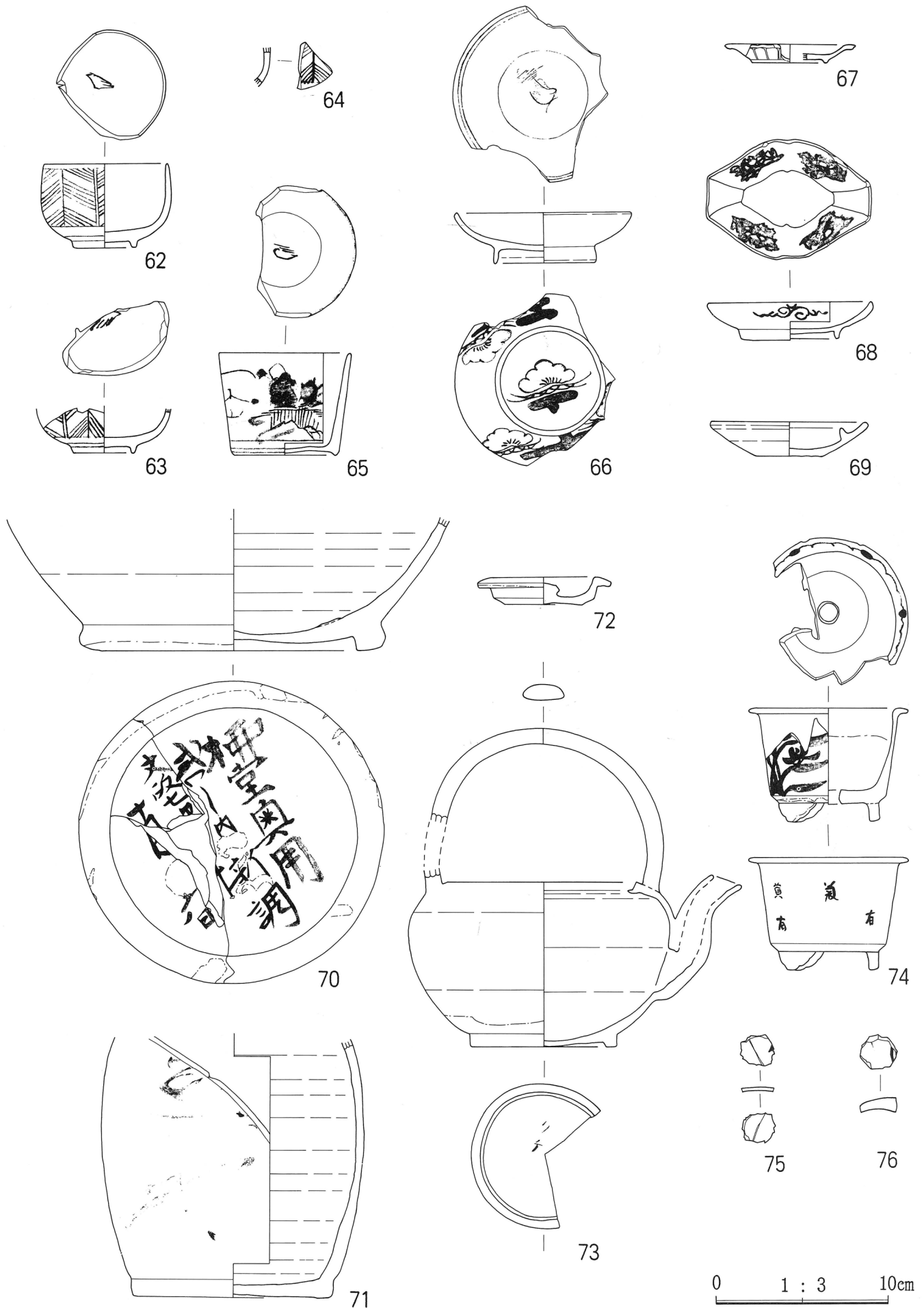


図版10 遺物実測図 (39は1/6、他は1/3)

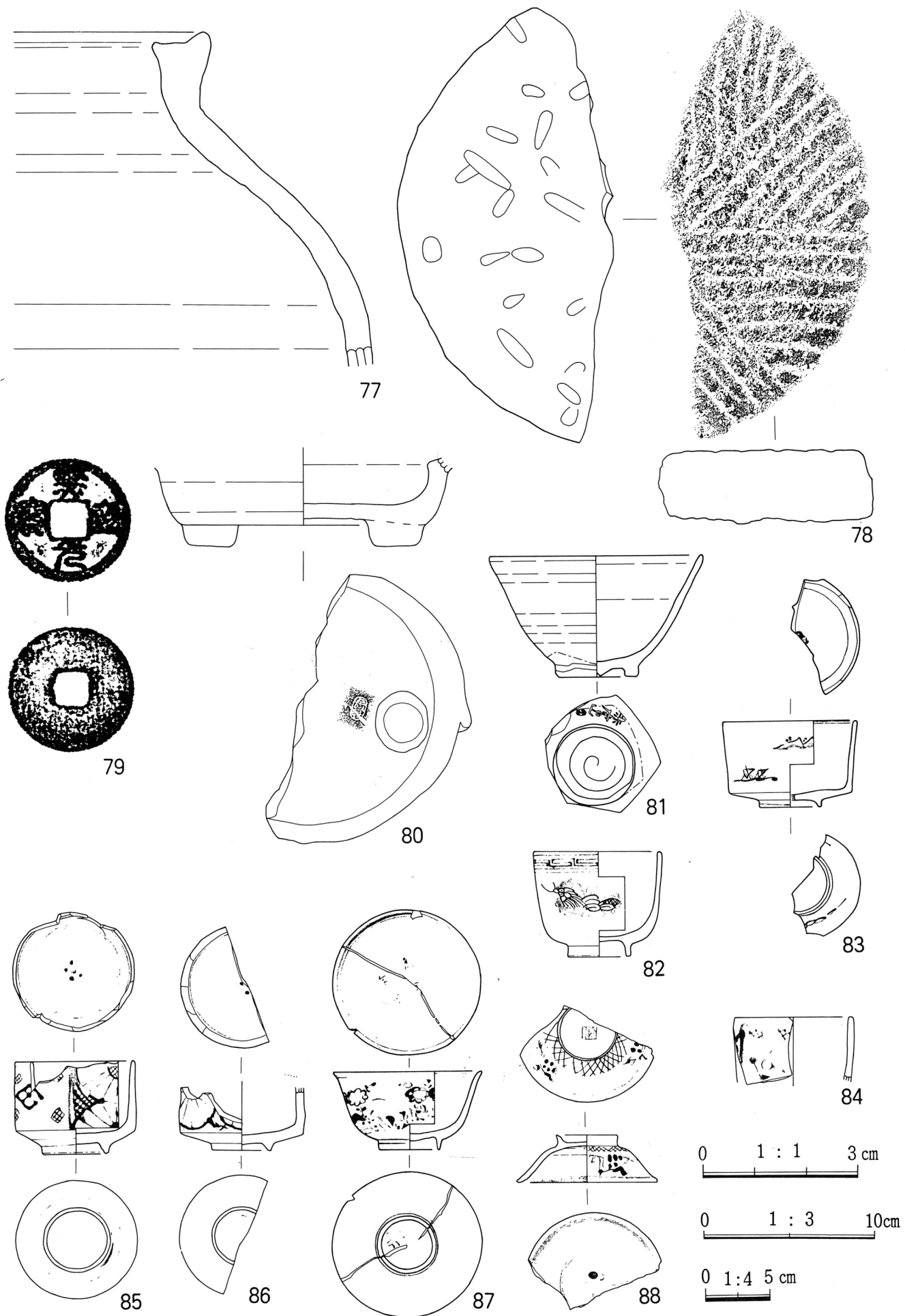


0 1 : 3 10cm

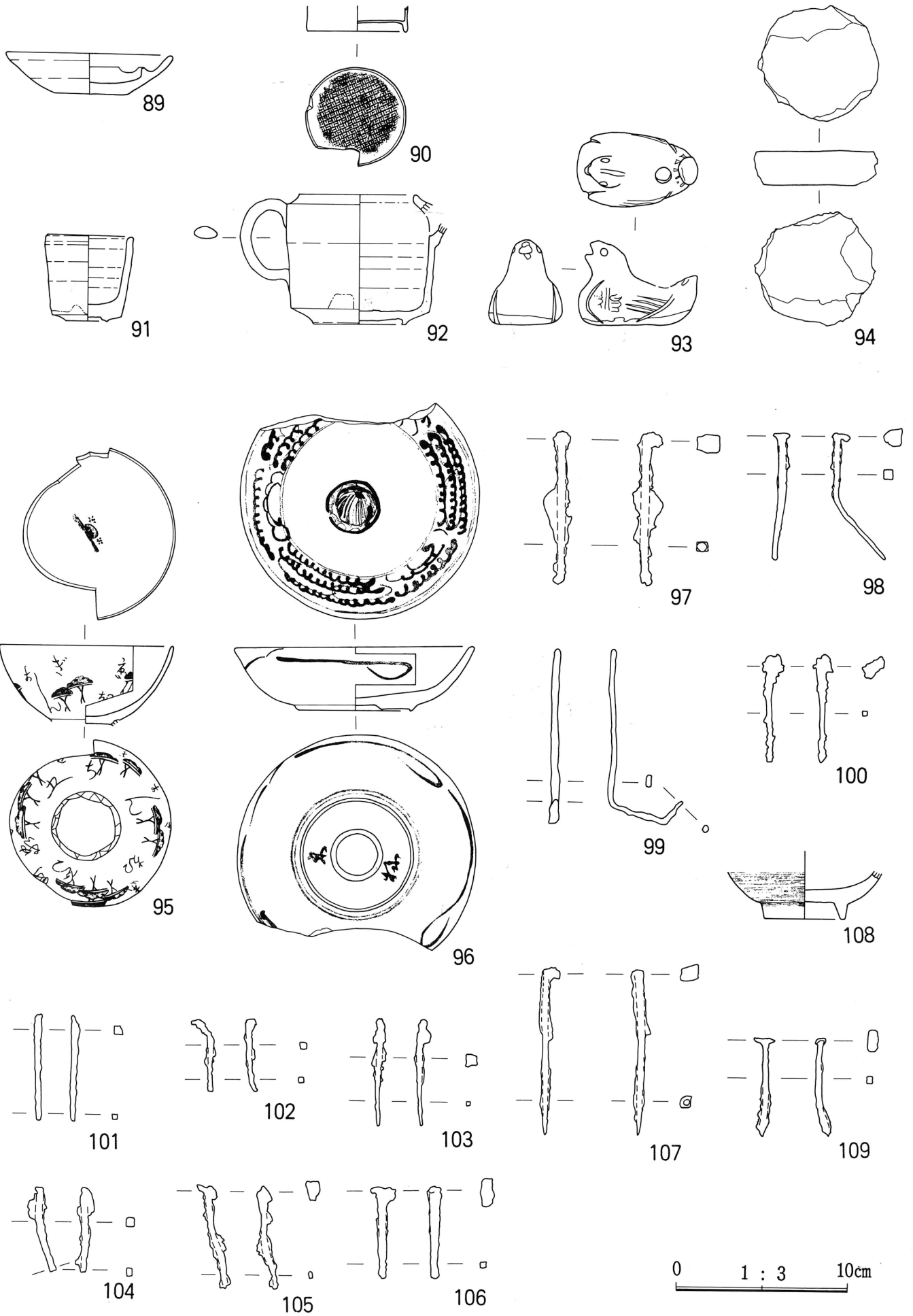
图版11 遺物実測図 (1/3)



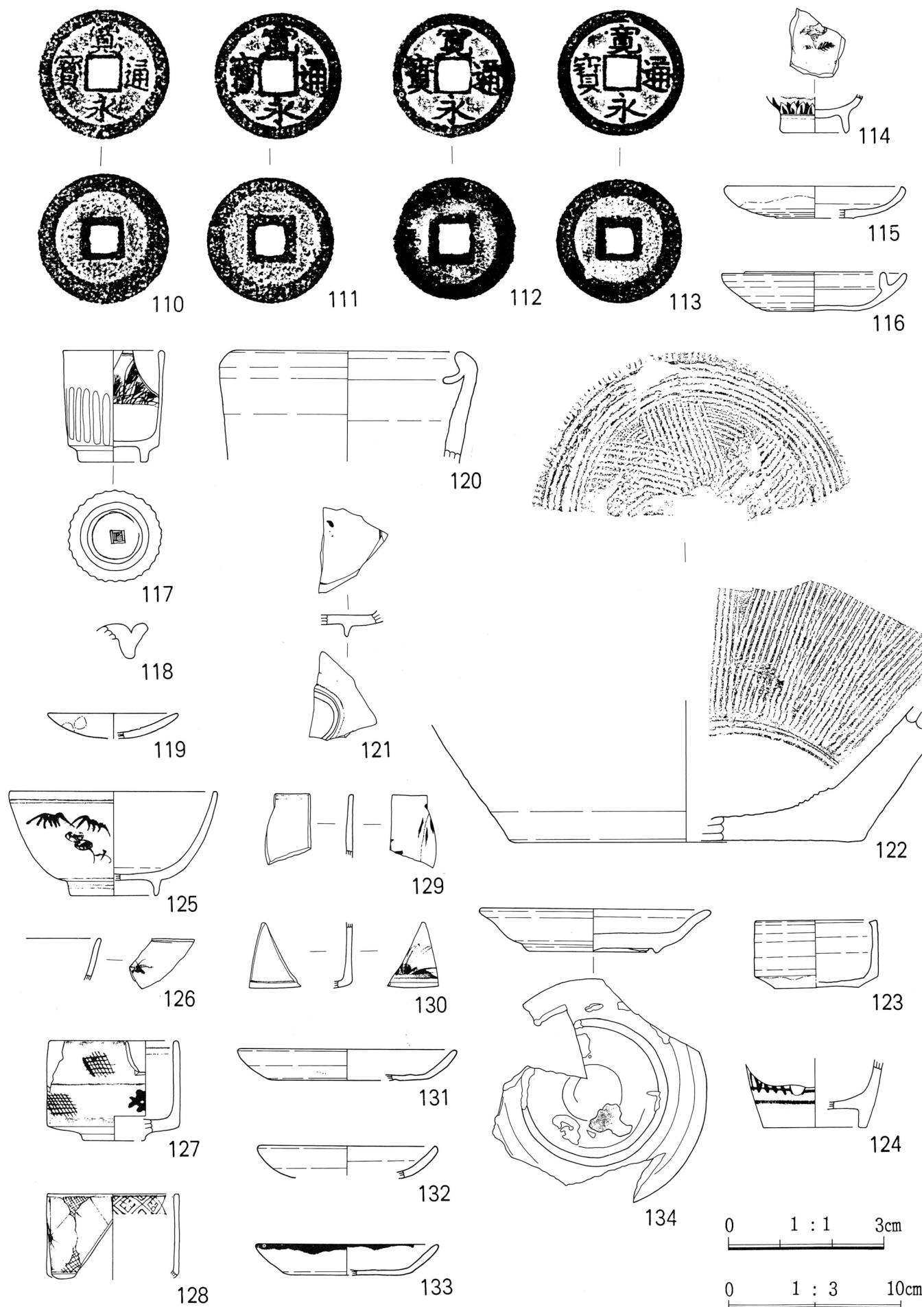
图版 12 遺物実測図 (1/3)



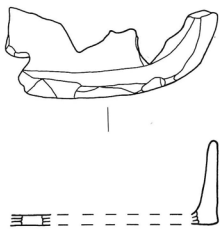
図版13 遺物実測図 (78は1/4、79は原寸、他は1/3)



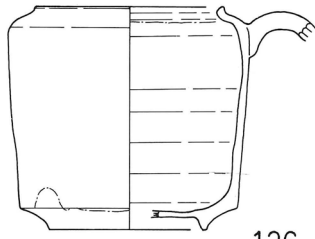
图版14 遺物実測図 (1/3)



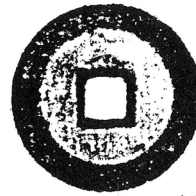
図版15 遺物実測図 (110～113は原寸、他は1/3)



135

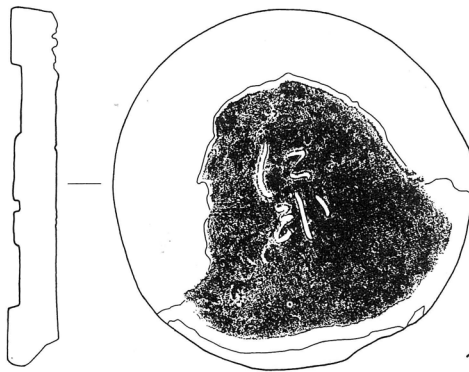


136

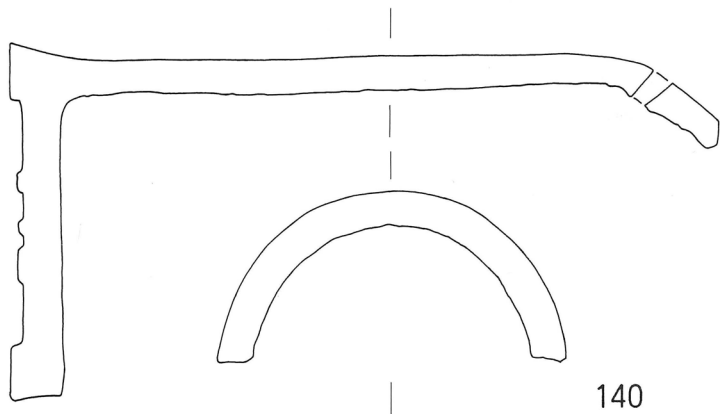


137

138



139



140

0 1 : 1 10cm



0 1 : 3 10cm



0 1 : 4 10cm



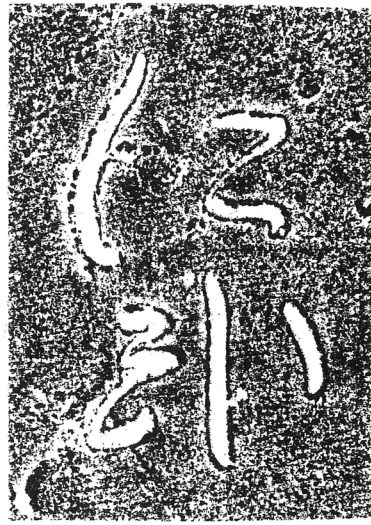
図版16 遺物実測図 (136・137は原寸、138・139は1/4、他は1/3)



图版 17 出土瓦刻印拓本



41



42



43



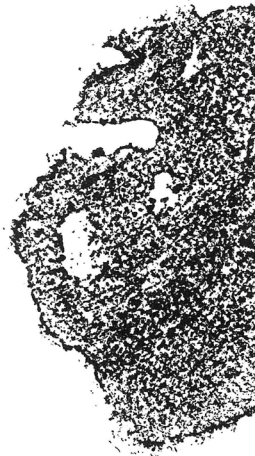
44



45



46



47



48



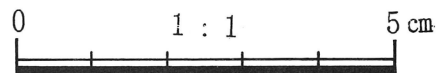
49



50



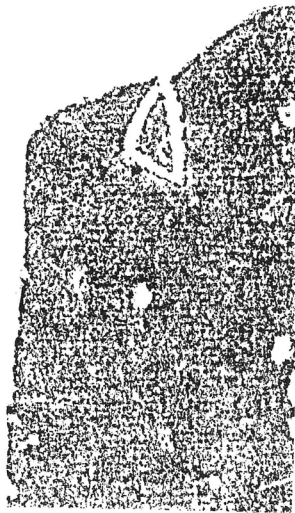
51



図版18 瓦ヘラ書き拓本



52



53



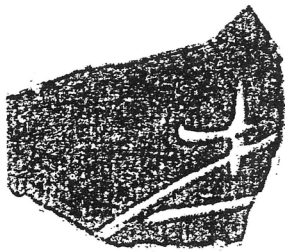
54



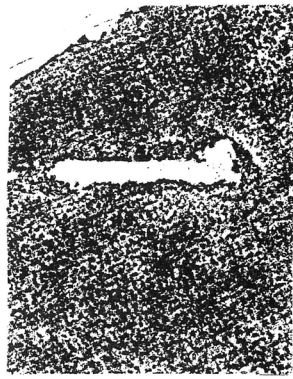
55



56



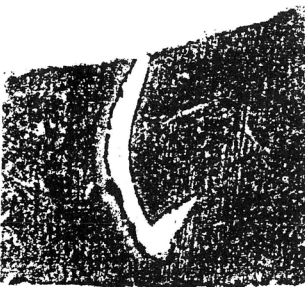
57



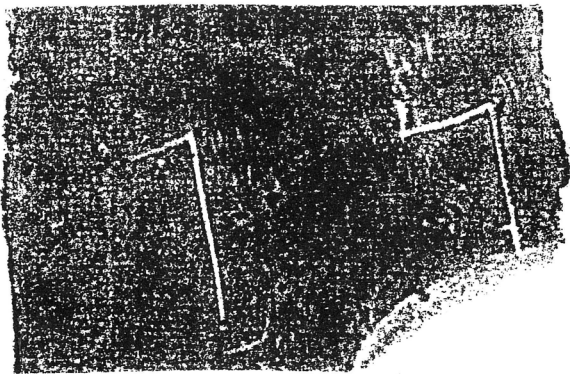
58



59



60



61



62



63

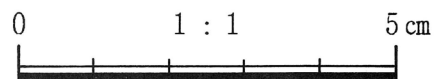


64



65

赤唐山



図版19 瓦へラ書き拓本・陶器刻印拓本

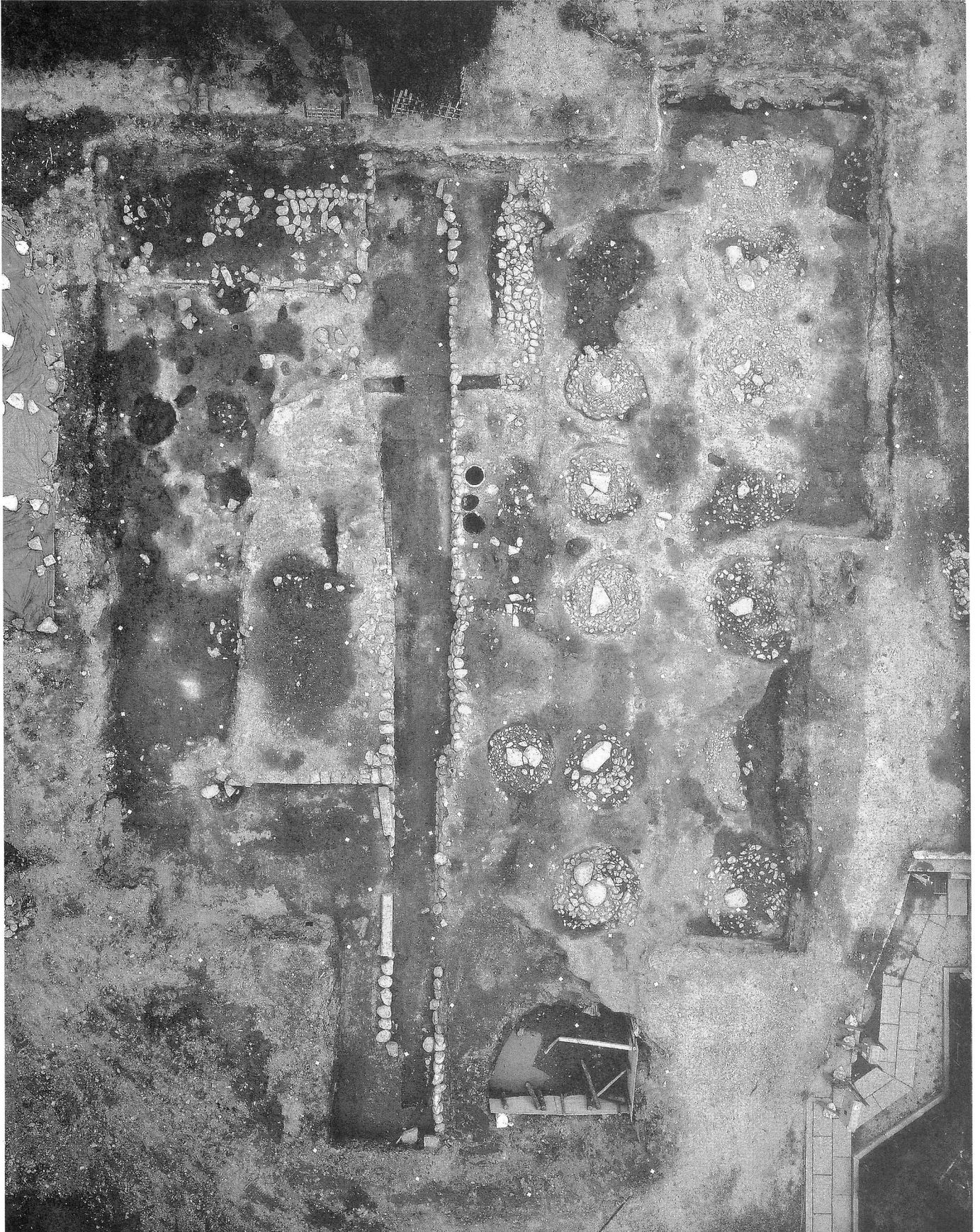


桑名城下町遺跡全景



発掘調査前近景

写真図版 1

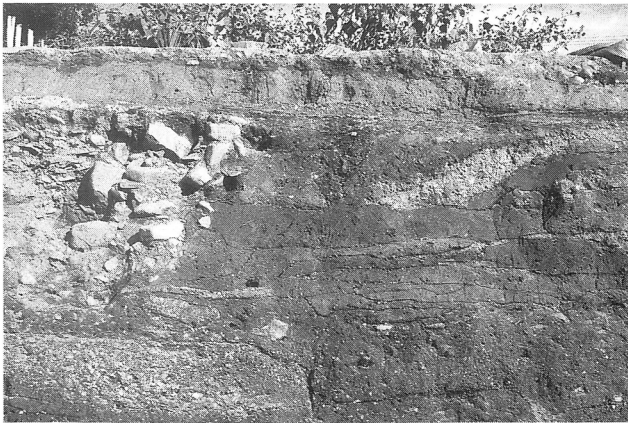


I 面 全 景

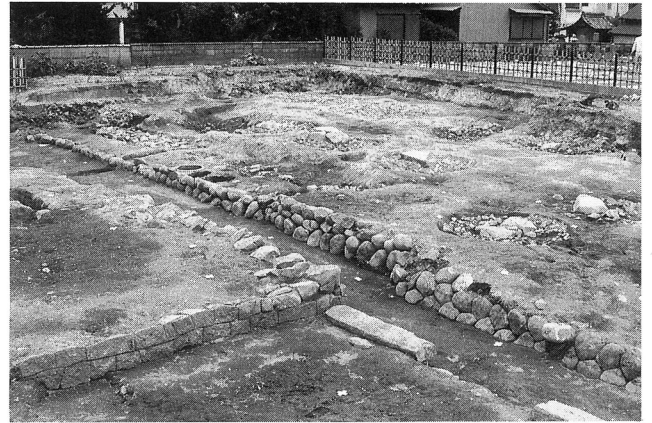
写真図版2



I面 遠景



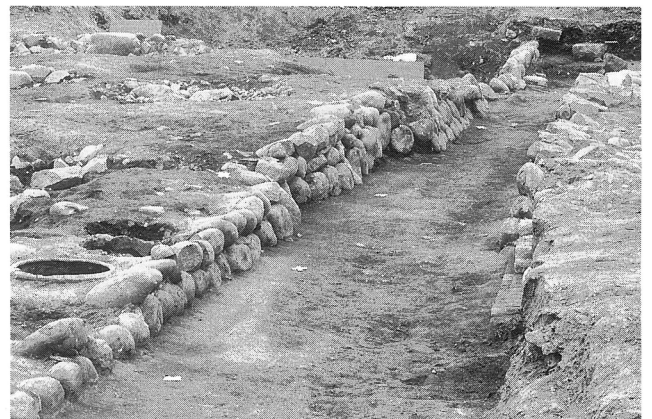
調査区東壁断面



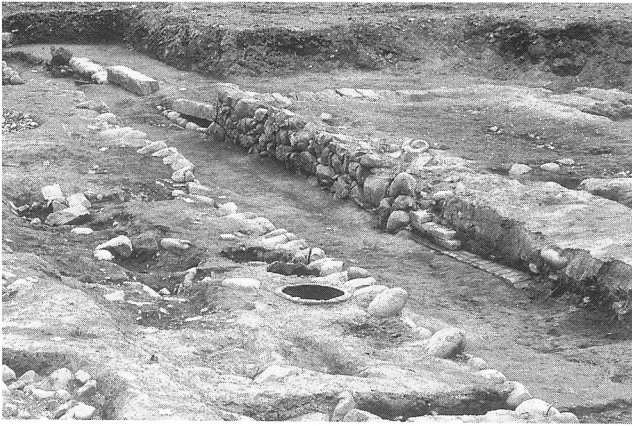
I面 石積1・石積3



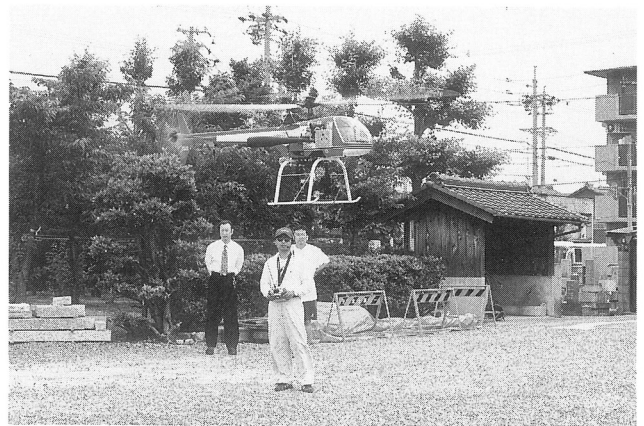
I面 土坑13
写真図版2



I面 石積1



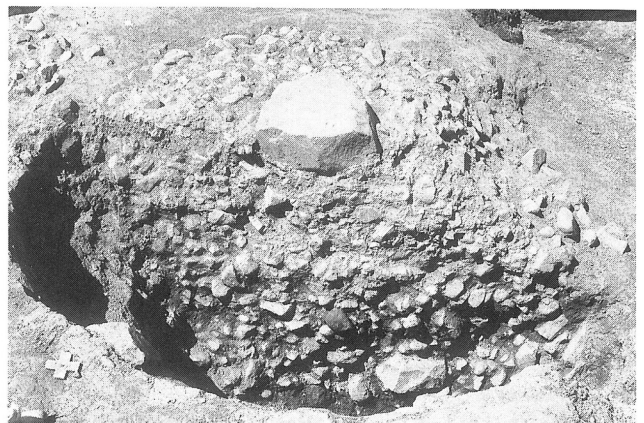
I面 石積2



I面 作業風景



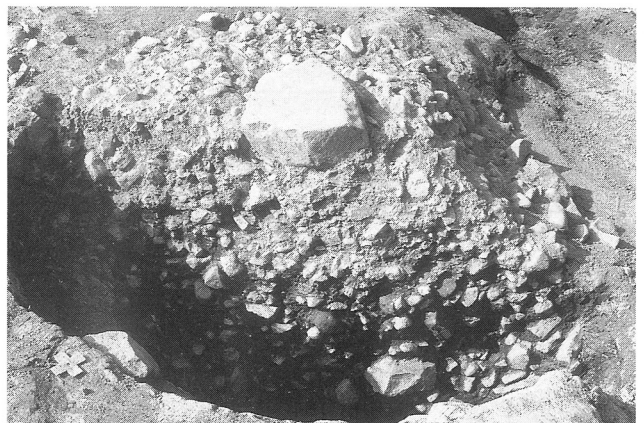
I面 土坑1



I面 土坑1



I面 作業風景



I面 土坑7



I面 作業風景



I面 土坑9



I面 土坑10



I面 土坑15



I面 土坑13



I面 土坑1~15



I面 土坑1~15完掘

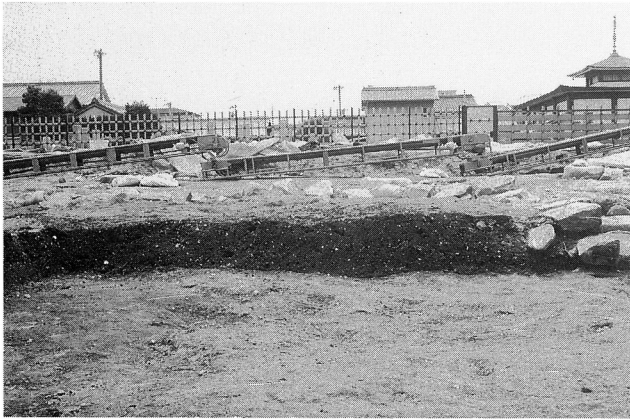
写真図版5



I面 基壇盛土断面



I面 石積3



I面 盛土断面 (石積3断ち割り)



I面 盛土断面



II面 全景



竈1・土坑2断面



出土遺物 (28)



竈1・竈2



出土遺物 (43)



竈1・竈2・土坑2 断ち割り状況



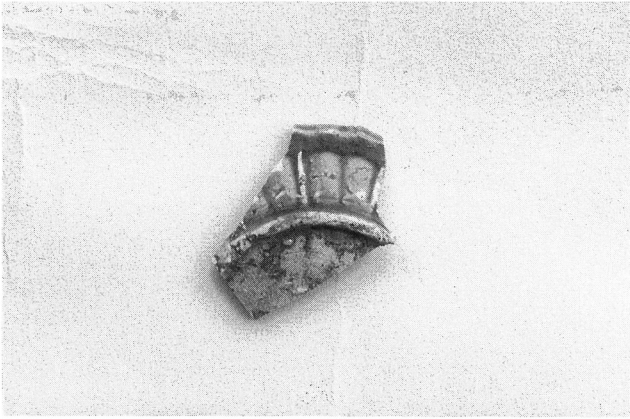
出土遺物 (43)



溝1



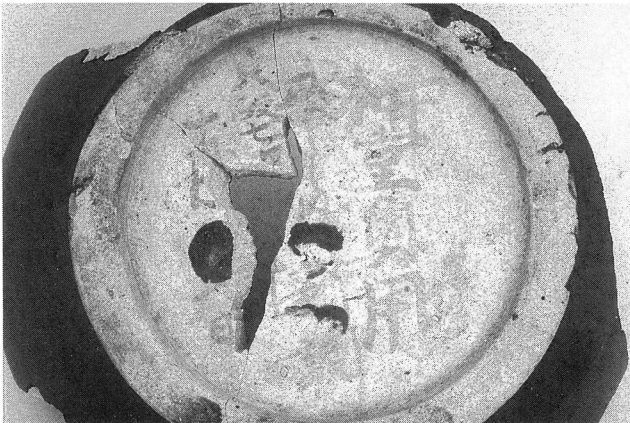
出土遺物 (44)



出土遺物 (67)



出土遺物 (87)



出土遺物 (70)



出土遺物 (91)



出土遺物 (74)



出土遺物 (92)



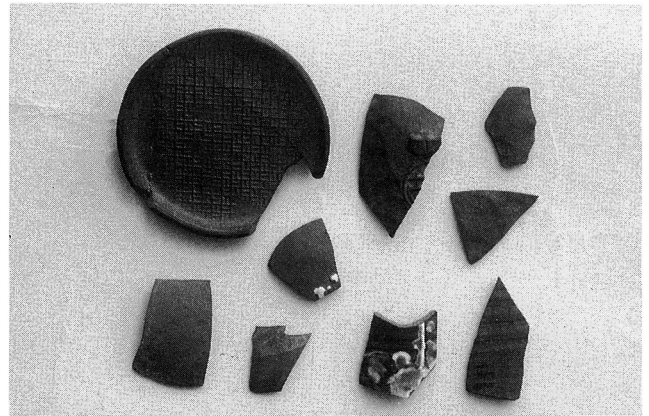
出土遺物 (81)



出土遺物 (93)



出土遺物 (94)



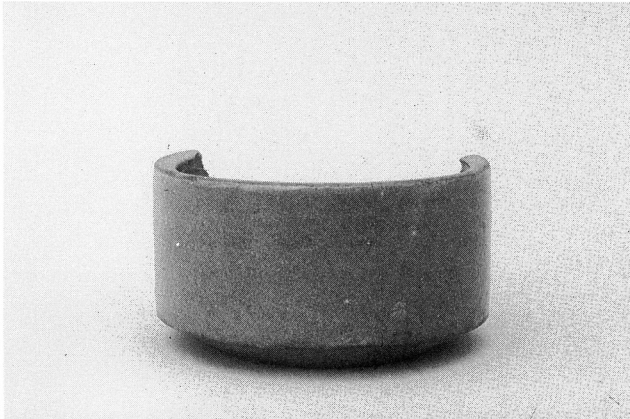
出土遺物 (萬古焼・Ⅱ面包含層)



出土遺物 (96)



出土瓦刻印 (5)



出土遺物 (123)



出土瓦刻印 (8)



出土遺物 (140)



出土瓦刻印 (10)

報告書抄録

ふりがな	くわなじょうかまちいせきはつかつちょうさほうこくしよ かやまちきゅうじゅうさんちてん						
書名	桑名城下町遺跡発掘調査報告書 萱町 93 地点						
編著者名	平野亜紀、日紫喜勝重、長沼毅						
編集機関	桑名市教育委員会						
所在地	511-8016 三重県桑名市中央町二丁目 37 番地 TEL 0594-24-1361						
発行年月日	西暦 2001 年 3 月 30 日						
ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査機関	調査面積 m ²	調査原因
		市町村 遺跡番号					
くわなじょうか まちいせき 桑名城下町 遺跡	かやまち きゅうじゅうさん ちてん 萱町 93 地点	No. 99	35° 3′ 25″	136° 41′ 50″	19990528～ 20010331	540 m ²	個人住宅建 設及び本堂 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
桑名城下町 遺跡	集 落 跡	近 世	基壇 石積 土坑 溝 埋甕 竈		近世陶磁器	中世遺物が 出土。	

三重県桑名市
桑名城下町遺跡発掘調査報告書
～萱町93地点～

2001年3月30日

編集・発行 桑名市教育委員会
印刷 (有) 日光印刷